

ブリテン新石器時代における死の考古学

藤尾 慎一郎

-
1. はじめに
 2. ブリテン新石器時代について
 3. 新石器時代のブリテンでは、どこから人骨が出土するのか
 4. 死の考古学に関する研究史 (19世紀～1980年代)
 5. 現在の死の考古学研究 (1980年代末～現在)
 6. 縄文時代の死の考古学
 7. おわりに
-

論文要旨

本稿は、ブリテン新石器時代の葬制研究を紹介したものである。ブリテン新石器研究は、近代考古学がはじまって以来、巨石建造物（メガリス）を研究対象にしてきた。巨石建造物が新石器時代の編年をおこなう際の指標として位置づけられてきたこともあるが、何よりもそこからみつかる大量のバラバラになった人骨が人々の関心をひきつけてきたからである。人骨がみつかるために、巨石建造物はしごく当然に墓と考えられ、なぜ、このような状況で大量の骨がみつかるのか、を考えた葬制研究が、ブリテン新石器研究の中心だったのである。

1950年代までは、大量の人骨が、バラバラになった状態で建造物内につくられた石室内におかれるようになった原因をめぐり研究がすすんだが、'60年代のいわゆるプロセス期になると、このような行為には生の世界の社会組織や構成原理が反映しており、巨石建造物はモニュメント（巨石記念物）と認識されるようになる。'80年代のポスト・プロセス期になると、一転してそのような行為に、生の世界の社会組織や構成原理は反映されないとしてプロセス学派は批判され、行為自身や石室構造にこめられた象徴性の解明をめぐり研究がおこなわれる。そして現在、新石器前期は儀礼を再優先していた時代との認識と、儀礼行為自身が人々の表現戦略であったと考えられるにいたっている。

縄文時代の葬制研究は、ここ20年ほど、親族研究・社会組織の解明を中心に進展してきた。最近わかってきたモニュメントでおこなわれていた祭りと、墓でおこなわれた死者儀礼とはどのような関係にあるのか。今後、どういう方向に向かおうとしているのか。再葬・合葬主体のブリテン前期新石器時代と一次葬・個人墓主体の縄文時代という枠組みをこえて考える。

1. はじめに

墳墓は考古学が対象とする重要な遺跡の1つで、考古学者は墳墓を分析することによって過去の人々の精神生活や社会構造の1面を知ることができると考えている。日本では、縄文時代の墳墓を対象に、親族組織や出自規定、社会組織の解明をめざした研究が、'70年代末から盛んにおこなわれるようになった。たとえば遺体の配置、とくに頭位方向に注目し縄文時代の親族組織の原理に迫った林謙作〔林 1977〕、合葬例と抜歯型式をもとに、縄文時代における親族組織、とくに出自規定の問題を取りあげた春成秀爾〔春成 1980〕はその代表である。

このような研究の特徴は、埋葬するにあたって表現された形式には墳墓を造った当時の社会の原理が反映されている、という大前提にたっていることにある。この大前提は'60年代のニュー・アーケオロジーからでてくる。L.ビンフォードは墳墓にみられるあり方が、社会のシステム自身の組織原理を反映したものと考えた〔Binford 1971〕。墳墓研究はこのような前提にたって、水平軸としての生物的地位（血縁的位置づけ）と、垂直軸としての社会的地位（階層）の違いをいかに読み取るかという点に精力を費やしてきたのである。

日本では、今もこの大前提はくずれることなく研究が続いているが、イギリスでは'80年代からポスト・プロセス学派とよばれる研究者達が、新石器時代の墓を研究するにあたってこの大前提に疑問を投げかけはじめ、現在では墓に階級や社会構造は反映されていないという見方が大勢を占めるようになってきている。

このような疑問はなぜ出てきたのであろうか。それを知るにはイギリスにおける「死の考古学」をめぐる長い研究史を振り返ることからはじめなければならない。それは4. で詳細に述べることとして、まず2. でイギリス新石器時代はどういう時代なのかふりかえることからはじめよう。先のような考えが出てくるようになった大きな要因の1つが縄文時代とは異なる文化内容にあると考えられるからである。つぎに3. で人骨が出土する遺跡の内容を説明する。イギリス新石器時代は墓以外から人骨が出土する割合が非常に高いからである。4. では、19世紀から1980年代までのイギリス新石器時代における「死の考古学」の歩みを整理する。とくに人骨が出土する巨大な建造物の機能的な位置づけを目指した研究と、実際の骨の出方や骨自身の分析を通じて実証的にその意味を考える研究の2つにわけて整理する。5. で、現代イギリスの葬制研究を紹介する。6. で縄文時代の墳墓研究の現状を確認し、今後どのような方向に向かおうとしているのか、イギリス考古学はなにを寄与できるのか、予察する。

2. ブリテン新石器時代について

ここまで私がイギリスとよんできた国の正式名称は、グレートブリテンおよび北アイルランド

連合王国 (The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland,略して U.K.) である。この国は、イングランド、ウェールズ、スコットランドのあるブリテン島と、アイルランド島の北東部を占める北アイルランドから構成される。本稿でこれから使用する「ブリテン」とはブリテン島をさす。対象とする地域は、ブリテン島のイングランド、ウェールズ、スコットランドおよび周辺の島嶼部で北アイルランドは扱わない (図1)。

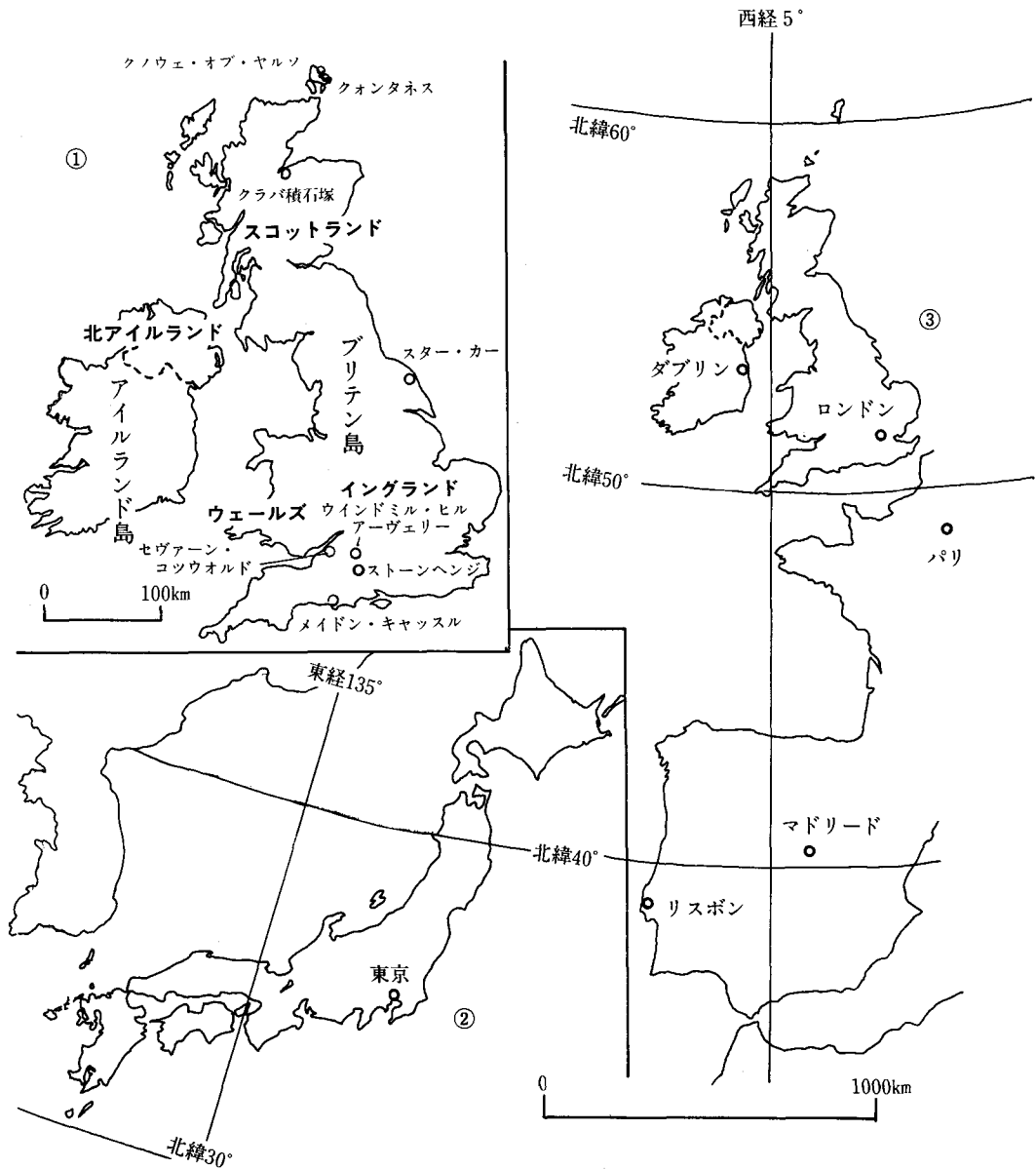


図1 日本とブリテン島の位置と面積の比較およびブリテン島新石器時代遺跡分布図
日本 (②) とブリテン島 (③) と同じ縮尺で緯度をあわせて比較したものである。ブリテン島がかなりの高緯度にあることがわかる。イギリスは日本列島に比べて面積は2/3、人口は1/2である。

ブリテン島は北緯50°から58°という高緯度にあるわりには、メキシコ湾流の影響でおどろくほど温暖・湿潤である。

ブリテン島の地理的な位置は非常に特徴的で、以下の点で日本列島と共通している。両島ともユーラシア大陸の端に位置するので、文明の中心地からみると辺境にあたる。しかも大陸から海によって隔てられているので、文化のはやり方が大陸内の諸地域とは異なっている。したがってよくいえば独自性をもった発展を遂げるのだが、悪くいえば文明から取り残され、吹き溜まった文化が幾重にも積もり重なった様相をみせる。

ブリテン島の地形は北部のスコットランドや西部のウェールズと、イングランドではまったく異なり、前者が平野に乏しく山がちの地形であるのに対して、後者は緩やかな丘陵地帯に小麦畑・牧草地・牧場が果てしなく広がる北海道を思わせる地形である。なかでもストーンヘンジのあるウェセックスのソールズベリー平原は広大かつ壮大である(写真1)。この地域には、新石器時代から多くの遺跡(モニュメント・墓)がつくられはじめ、鉄器時代(800B.C.)がはじまるまでの約3000年間、南イングランド新石器時代人の文化センターであり続けた。

ブリテン新石器時代は3700B.C.~1800B.C.,日本の縄文時代前期中頃~後期前半に併行する(表1)。さらに2500B.C.境に前期と後期に細別される。

ブリテン新石器時代はG.チャイルドの定義以来、70年近くにわたって農業社会として認識されてきた[Child 1925]。しかし今やこのような時代認識を大きく修正しようという意見がだされている。穀物を栽培し家畜を飼っていたことは間違いないが、農耕や牧畜を主な生業とした定住的な農業社会ではなかったという見方である。現代ブリテンの葬墓制研究はこのような社会観にたったものといえる。これから紹介するブリテン新石器時代が、採集・狩猟・遊牧・栽培・漁撈を生業基盤とする非定住の社会だったという意見があることに注意してほしい。



写真1 壮大なソールズベリー平原
ストーンヘンジから東方向をのぞむ

表1 イングランド・日本 時代区対照表〔藤尾1994〕

	イングランド	日本
10,000B.C	旧石器時代	旧石器時代
9,000B.C		縄文草創期
8,000B.C	中石器前期 後氷期	縄文早期 後氷期
7,000B.C	中石器後期	
6,000B.C	森林相動物への変化	縄文前期
5,000B.C	ウインドミル・ヒル	
4,000B.C	森林破壊 ウェスト・ケネット ロングバロウ	
3,000B.C	新石器前期 温暖・多雨	縄文中期
2,000B.C	新石器後期 温暖・乾燥	縄文後期 大湯環状配 石墓地 寺野東環状盛土遺構 キウス竪穴墓地
1,000B.C	青銅器前期 青銅器後期 冷涼・多雨	
500B.C	鉄器時代	縄文晩期
1B.C	ローマ時代	弥生早期 前期 中期 後期
AD500		古墳時代

3. 新石器時代のブリテンでは、どこから人骨が出土するのか

私達は一般に、人骨が見つかるかどうかで墓かどうか判断している。人骨が出土するブリテン新石器時代の遺跡には、断欠周溝状遺構 (Causewayed Enclosure)、大石籬 (Henge)、円・長形墳 (Circle/Long Barrow)、積石塚 (Cairn) などがあるが、確実に墓と考えられているのは後期に出てくる個人墓ぐらいである。特に前期の場合、人骨はおかれたり、遺棄されたものがほとんどであるという意見もある。まずこれらの遺跡がどのようなものか紹介する。

(1) 断欠周溝状遺構 (Causewayed Enclosure) (図2, 写真2)

間欠周溝集落(都出 1989)という遺跡の性格まで踏みこんだ訳し方もあるが、ここでは機能まで踏みこまない意味で断欠周溝状遺構と呼ぶ⁽¹⁾。この遺構は新石器時代前期につくられたもので、

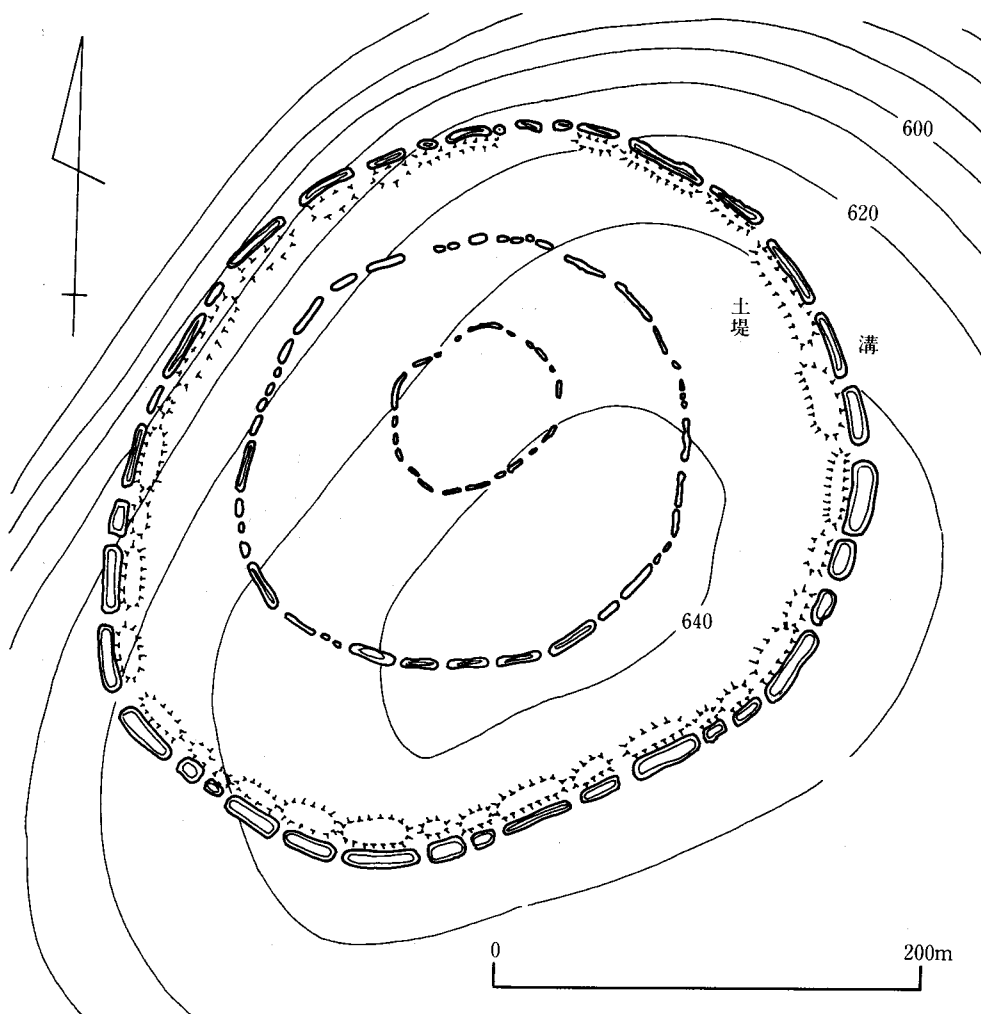


図2 ウィンドミル・ヒル断欠周溝状遺構復原プラン (ケイラーの調査図面に加筆) (Malone 1989) より加筆転載



写真2 ウィンドミル・ヒル断欠周溝状遺構航空写真 (Malone 1989) より転載

平面形は略円形である。土堤を内側にもつ円弧状の溝が周溝状につらなって、円形にまわる。なかには4条に達するものもある。環濠集落の濠が一定の幅で短く途切れている様子を想像していただくとよい。防御用集落に形態が似ていたこともあって、防御施設と呼ぶこともある。長径は164.5mから387mに達するものまであり巨大な規模をほこる。主に丘の上につくられる。

人骨は、土器や動物の骨、焼けた有機物などとともに溝のなかから出土する。ほとんど破片になっていて雑に埋められている場合が多いが、なかには入念に埋められたものもある。機能をめぐり、これまで高城説 [Child 1949, 角田 1962, 都出 1989], 屠殺場説 [Piggot 1954], 農耕儀礼場説 [Renfrew 1973 a], 宗教的祭儀場説 [Megaw 1979, Thomas 1991] が唱えられてきたが、最近よくみられるのは農業とは無関係の宗教的祭儀の場とする最後の説である。

J.トーマスは、溝のなかから動物や人間の骨、フリント剥片、土器片を含む有機物の塊が出土することに注目する [Thomas 1991]。この塊は、大量の灰を含む暗くミルク色っぽい有機物がレンズ状に堆積したものだが、埋納以前に十分に腐らせ堆肥化されていたと考えられている。塊はちょうどカゴ一杯分の量である。埋納直前に火を焚いてから素早く埋められている。これは象徴的な遺物や物質を詰めたあと密封するという行為を意味し、新石器時代前期社会の重要な祭祀行為の1つと考えられている。人骨が出土しても墓とは考えられていない代表的な例の1つである。

(2) 大石籬 (Henge)⁽²⁾ (図3・4, 写真3)

新石器時代後期の巨大な建造物の1つで、円形にめぐる壕・土塁で囲まれた巨大な空間に、木造建造物や石または木のサークルがつくられる。壕はとても深く(図4)、壕の外側に接する土塁もかなり高い。入口は1~4ヶ所で、それ以外にはない。木造建造物、ストーン・サークル、ウッド・サークルを場にした祭儀がおこなわれていたと考えられている。

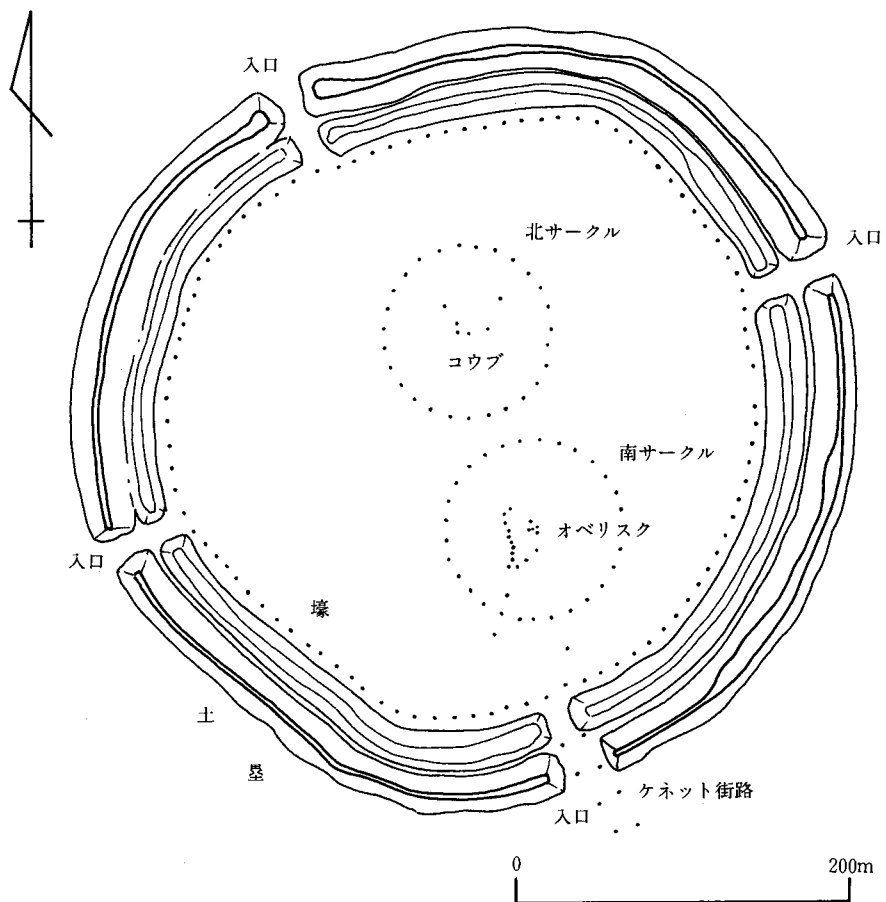


図3 アーヴェリー大石籬平面図〔Malone 1989〕より加筆転載。本遺跡は3つの列石をもつ。最大の列石は98個の立石からなる。内側にある2つの列石は、北サークル、南サークルで、それぞれ中央にコウブとオベリスクという巨大な立石をもつ。ケネット街路はここから東南方へ1.3kmのあいだ列石が連なっている。

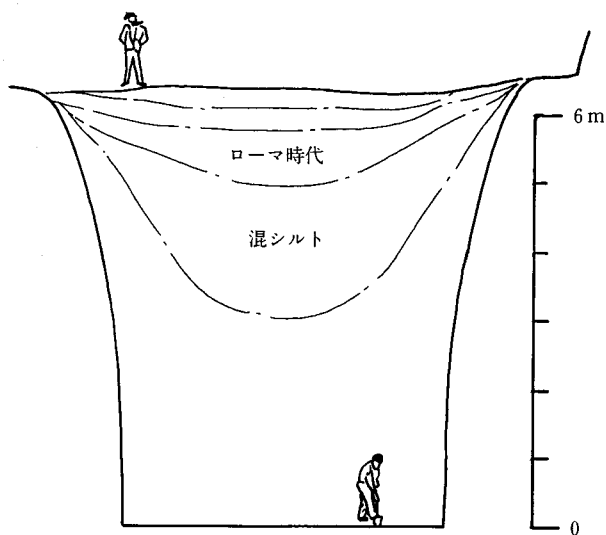


図4 アーヴェリー大石籬断面模式図〔Nichol 1983〕より加筆転載。塚の中からはシカの角製ピックや人骨が出土する。

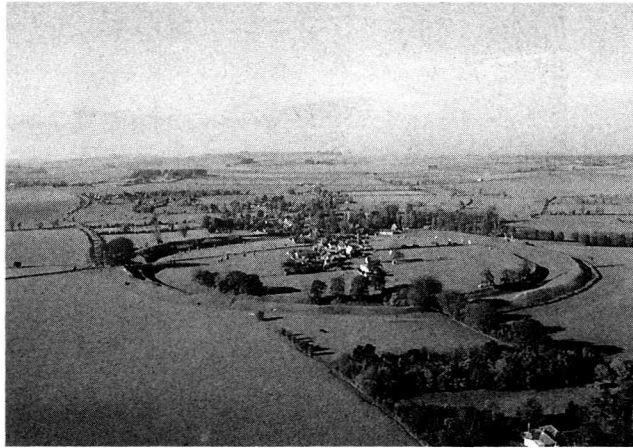


写真3 アーヴェリー石籬写真〔イギリスヘリテージポストカードより〕

人骨は壕のなかから出土するが断片になったものが多い。大石籬の機能は、前期の断欠周溝状遺構の機能を受け継いだものと考えられているが、規模や構造は隔絶している。

(3) 円・長形墳 (Circle/Long barrow), 積石塚 (Cairn)

ブリテン新石器時代の遺跡として特に有名なものである。巨大な墳丘や積石塚を築くことを特徴とする。内部主体によって2つにわかれる。

A 石室のない長形墳 (unchambered long barrow)

¹⁴C年代によると石室をもつ長形墳より早く出現するといわれている。石室をもつものとは埋葬儀礼を異にすると考えられており、新石器人がどのような埋葬儀礼をおこなうかで、非石室にするのか、石室にするのか選択したと考えられている。

墳丘の平面形は、基本的に東西方向に主軸をもつ長方形、または台形である。台形の場合は、東側の幅が必ず広く、埋葬施設は東側に必ず開口する。墳丘の長さは平均30~60mであるが、なかにはメイドン・キャッスル (Maiden Castle) のように545mに達するものもある。

長形墳は、まず内部主体をつくり、そのあと墳丘予定地に平行して溝を掘り、最後に溝から掘りあげた堅いチョークを使って、高さ1~7mの墳丘を築く(写真4)。開口部のある墳丘の東端には、墓前祭祀をおこなう舞台となる前庭部をとまなう。内部主体には木造の死の家 (mortuary house) がある。

人骨は死の家 (mortuary house) と溝から出土する。前者には1~数遺体が床面の上に直接おかれている。遺体には、関節がつながっている完全なものと、関節が外れたバラバラの骨がある。副葬品 (grave goods) はともなわない。南イングランドの死の家 (mortuary house) に葬られた遺体はほとんどが土葬で、火葬はともなわないが、ヨークシャー州地域では、焼けた骨がたまに見つかることがある。これは死の家ごと燃やされたために黒焦げになったと考えられている。

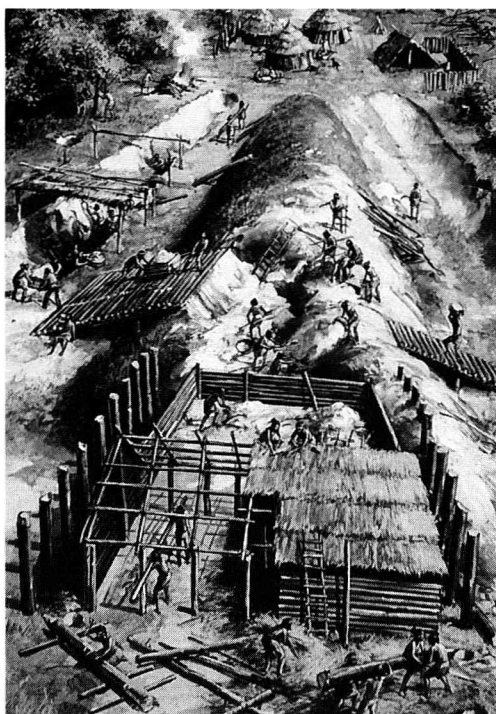


写真4 長形墳築造過程復元図(石室のない長形墳)〔アンドーバー博物館ポストカードより〕
石室をもたない長形墳は、このような木造の木屋を墳丘内につくり、そこに死者の骨を置く。墳丘は、両側の溝を掘った土とチョークを混ぜたもので築く。

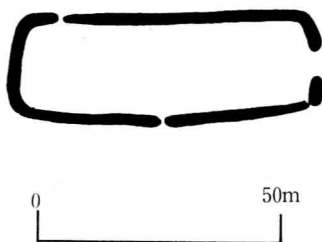


図5 長方形断欠周溝遺構〔Adkins & Adkins 1982〕より転載
(オックスフォードシャー州)
一次葬がおこなわれた場所と考えられている。

バラバラの骨は、どこか別の場所で骨化されたものが、移されてきたものといわれている。遺体が晒されていたと考えられている遺構が、間のあいた溝と溝に囲まれた略方形の空間(mortuary enclosure または long mortuary enclosure)で、四隅のあいた長方形断欠周溝状の遺構である(オックスフォードシャー州ドルチェスター)(図5)。

B 石室墓(chambered tomb)(図6)

長形墳や円形墳、積石塚の内部主体として一般的なものである。従来、巨石墓とか羨道墓とか

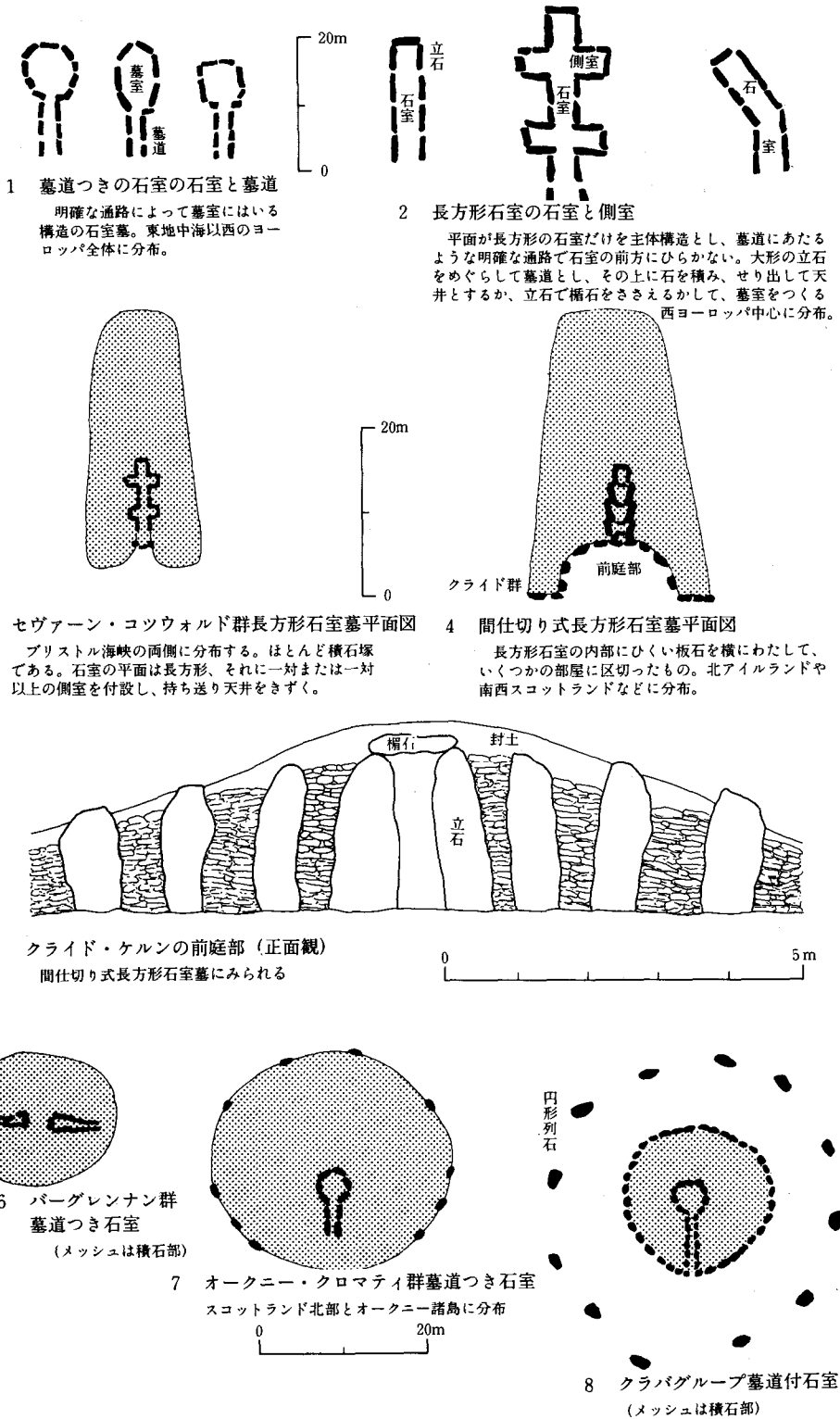


図6 ブリテンにおける石室墓 (Adkins & Adkins 1982) より加筆転載
1・2 はヨーロッパの巨石墓の二大基本形 (墓道つき石室と長方形石室)
3・4 は長方形石室の代表的な地域型。5 は4 の前庭部の特徴的な正面観
6~8 は墓道つき石室の代表的な地域型

よばれていたものである。立石で墓室や墓道をつくって組みあわせた、まさに日本の横穴式石室のようなものである。墓室と墓道の組みあわせをもとに2つのタイプが設定されている。

a 墓道つき石室⁽³⁾ (passage graves)

幅1 m、高さ1 m以下の通路(墓道)が、より広く天井の高い石室(墓室)につながっているものである(図6-1)。石室の平面形には長方形、正方形、多角形、円形がある。このタイプの石室は、普通、円形の墳丘か積石塚をもつ(図6-6~8)。

b 長方形石室 (gallery graves)

両側が並行になった回廊を基本とした石室である(図6-2)。回廊にはまっすぐ延びたものや途中で屈折したものがある。また回廊の脇に側室(transepts)をもつものもある。墓道つき石室より、高い天井と、長い回廊に特徴がある。このタイプの石室は長形墳か長形ケルンの内部主体としてよくみられる(図6-3・4)。

石室墓にはこのほかにも多くの地域型⁽⁴⁾があり、宗教や埋葬儀礼、集団差と結びつけた説明がおこなわれている(図7~9)⁽⁵⁾。

4. 死の考古学に関する研究史 (19世紀~1980年代)

ブリテン新石器時代における死の考古学に関する研究には2つの側面がある。1つは巨石建造物(メガリス)の機能をめぐる研究、そしてもう1つが、巨石建造物内部から発見されるバラバラになった骨の意味をめぐる研究である。

巨石建造物機能論と人骨の意味論は本来一体のものとして研究されるべきであるが、このように別々に進められてきた経緯がある。2つがようやく一連のものとして研究されるようになったのは、石室構造の違いと埋葬習俗の違いを結びつけて考える研究がでてくる'80年代になってからである。

ブリテンの近代考古学は、そもそもデンマークのC.J.トムゼンの3時期区分法が紹介された1848年から本格化し、これまで輝かしい歴史をつみかさねてきた。このブリテン考古学史を整理した人のなかにC.レンフリーがいる[Renfrew 1976]。彼はブリテン考古学の歴史を19世紀の古典期、20世紀中頃までの歴史期、'60~'70年代のプロセス期にわけた。本稿ではこれに1980年前後からはじまるポスト・プロセス期を加えた4期にわけて、死の考古学の歩みを整理し、時代ごとの研究の特徴に迫ってみたい。

(1) 古典期 (1860~1920年代)

説明の都合上、巨石建造物など遺跡の機能論をめぐる研究をA、人骨の意味論をめぐる研究をBにわけるとする。

A 巨石建造物機能論

この時代の知識人の関心は、当時世界を支配していた大英帝国の出自の正統性を探ることにあつた。なぜイギリスは世界の覇者となりえたのか。そのルーツはどこにあるのか。

大英帝国は、神に選ばれた自分達の祖先がエデンの園からはるばる離れた西ヨーロッパにやってきたことから始まるという潜在的な意識が、巨石建造物の起源問題に結びついていた。

新石器時代細分の指標として巨石建造物の構造変化を最初に取りあげたのは G.O.モンテリウスである〔Montelius 1899〕。型式学の祖として有名な彼は、巨石建造物は、このようなアイディアをもつ建造者が移住したことによってもたらされ、つくられたという伝播論の立場に立っている。

B 人骨の意味論

巨石建造物、とくに長方形石室墓内からたくさんの人骨がバラバラの状態で見つかることは18世紀から注目され、なんらかの儀礼と関連するものとして理解されていた。20世紀初頭までに知られていた事実は次の4点である。

- a 石室内には非常に多くの人骨が埋葬されている。
- b 死後すぐに、しかも1度に多人数を埋葬した。
- c ほとんどの骨が打ち壊され、バラバラにされ、無秩序におかれている。
- d ただし、わずかに2～3例だけ完全な骨がある。

この4点をうまく説明するにはどうしたらよいか、その答えを求めることにこの時代の新石器時代研究の目的があつた。代表的なものに継続埋葬説⁽⁶⁾、納骨堂説⁽⁷⁾、殉葬墓説⁽⁸⁾がある。これらはすべて、石室は墓であるという前提にたっている。

古典期の研究の特徴は、特徴的な骨の出方をする巨石建造物の機能はなにかという点をめぐって、墓という前提で議論がすすんでいた点にある。なお新石器時代が農業社会であるという時代認識はまだない。

(2) 歴史期 (1920～1960)

いわゆるチャイルドの時代で、彼の考えは日本考古学にもっとも強い影響を与えている⁽⁹⁾。

A 巨石建造物機能論

チャイルドは巨石建造物を農業社会の合葬墓 (collective burial) と考え、伝播論の立場から起源を地中海に求めた〔Child 1957〕。他にも S.ピゴットの宗教施設説⁽¹⁰⁾〔Piggot 1965〕、G.ダニエルの農業民の墳墓説⁽¹¹⁾〔Daniel 1950〕がある。彼らがいずれも伝播論の立場にたっている点にこの時期の最大の特徴があるといえよう。

B 人骨の意味論

ここではダニエルとピゴットの研究を紹介する。

a 〔Daniel 1950〕

彼は、なぜ石室内から大量の人骨が出土するのかという点に大きな関心をよせた。彼は何回に

もわけて埋葬され、累積された結果、大量の人骨が出土すると考えた。またなぜそのようなことがおこなわれたのかという問に対しては、石室が納骨堂としてつかわれたから、と説明した。現在の言葉で表現すると、一次葬を別の場所でおこない、次に石室内で二次葬をおこなったことになる。一次葬と二次葬という識別をはじめてうちだした研究といえよう。

彼の研究でもうひとつ重要なことは、石室内で見つかる骨には長肢骨に比べ頭骨の数が圧倒的に少ないという不均衡に注目したことである⁽¹²⁾。この問題はピゴットによってさらに深められる。

b [Piggot 1954・1962]

ピゴットはダニエルが指摘した骨の不均衡を、ウェスト・ケネット長形墳 (West Kennet) (図7～10) の石室の調査で再確認した。頭骨や長骨は農業生産の豊穰を願うための儀式につかうために、二次葬の場である石室に何回かにわたって持ちこまれたり、また別の場所へ移すために抜き取られた結果、不均衡が生じたと説明したのである⁽¹³⁾。この骨の移動は、骨の循環説として現在まで引き継がれている。

骨の形質学的な研究は、たくさんの骨の出土が知られていたにもかかわらずあまり進んでいな



図7 ウェスト・ケネット長形墳 (ウイルトシャー州) [Marsden 1989] より転載

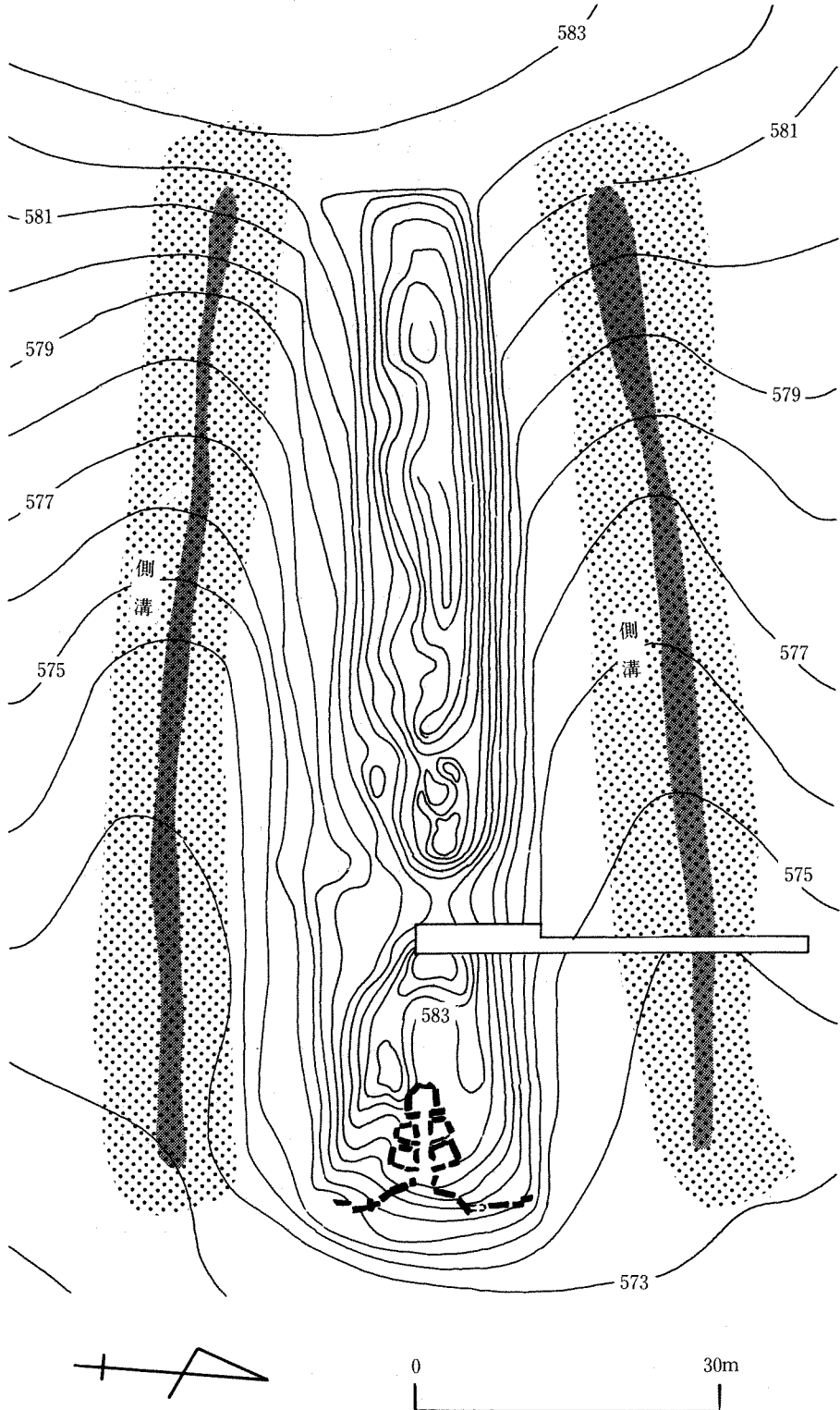


図8 ウエスト・ケネット長形墳丘測量図〔Piggot 1962〕より加筆転載

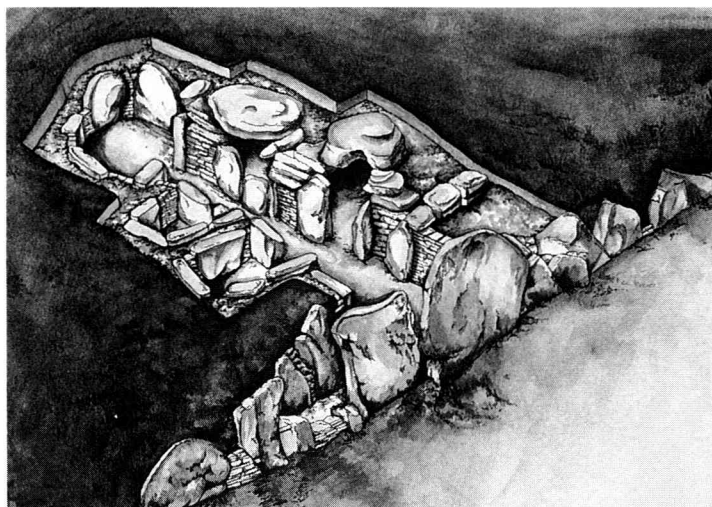


図9 ウェスト・ケネット長形墳石室模式図〔イギリスヘリテージポストカードより〕

かった。ピゴットのウェスト・ケネットの調査では、石室ごとの骨に形質的な偏りのあることが、はじめて指摘されたほか、多くのことが明らかにされている(図10・11)。たとえば石室ごとにみられる牛と豚の出土状況の違い、人骨の病理学的調査からえられた集団の遺伝的特徴などがあげられよう⁽¹⁴⁾。ピゴットは石室ごとにみられる形質的な偏りや遺伝的特徴について深く考察していないが、現在のポスト・プロセス研究を支える実証的データを提供している点は評価される。

歴史期はブリテン新石器時代研究のなかでもっとも実証的な研究が進んだ時期である。データの示す意味や解釈への取り組みは、必ずしも十分とはいえない面もあったが、この時期に明らかになった骨の不均衡や骨の循環という見方は、現在の解釈の重要な鍵になっていることに注意したい。

(3) プロセス期 (1960・1970年代)

なんといっても新石器時代の細分に巨石建造物の構造変化を利用するモンテリュウス以来の型式学的方法が、¹⁴C年代測定法にとってかわられたことの意味は大きい。新石器時代の年代は従来より一気に1700年もさかのぼることとなり、これまで東地中海からの伝播論によって説明されてきたブリテン新石器時代の起源は、新進化主義にもとづく自立発展論で説明されるようになった。

このような新石器時代のはじまりに関する考え方の大幅な変更のなかで、'50年代の実証的な方法にかわるあらたな方法論の登場により、死の考古学研究も大きく進展することになる。

A 巨石建造物機能論

この時期の巨石建造物機能論は、これまでの、誰がなんの目的で造ったのかという問題設定をようやく離れ、ここでおこなわれていた遺体の措置が何を反映したものなのかという方向に進む。

これは、それまでの研究が技術や経済の面でしか説明しようとせず、社会構造の解明という視

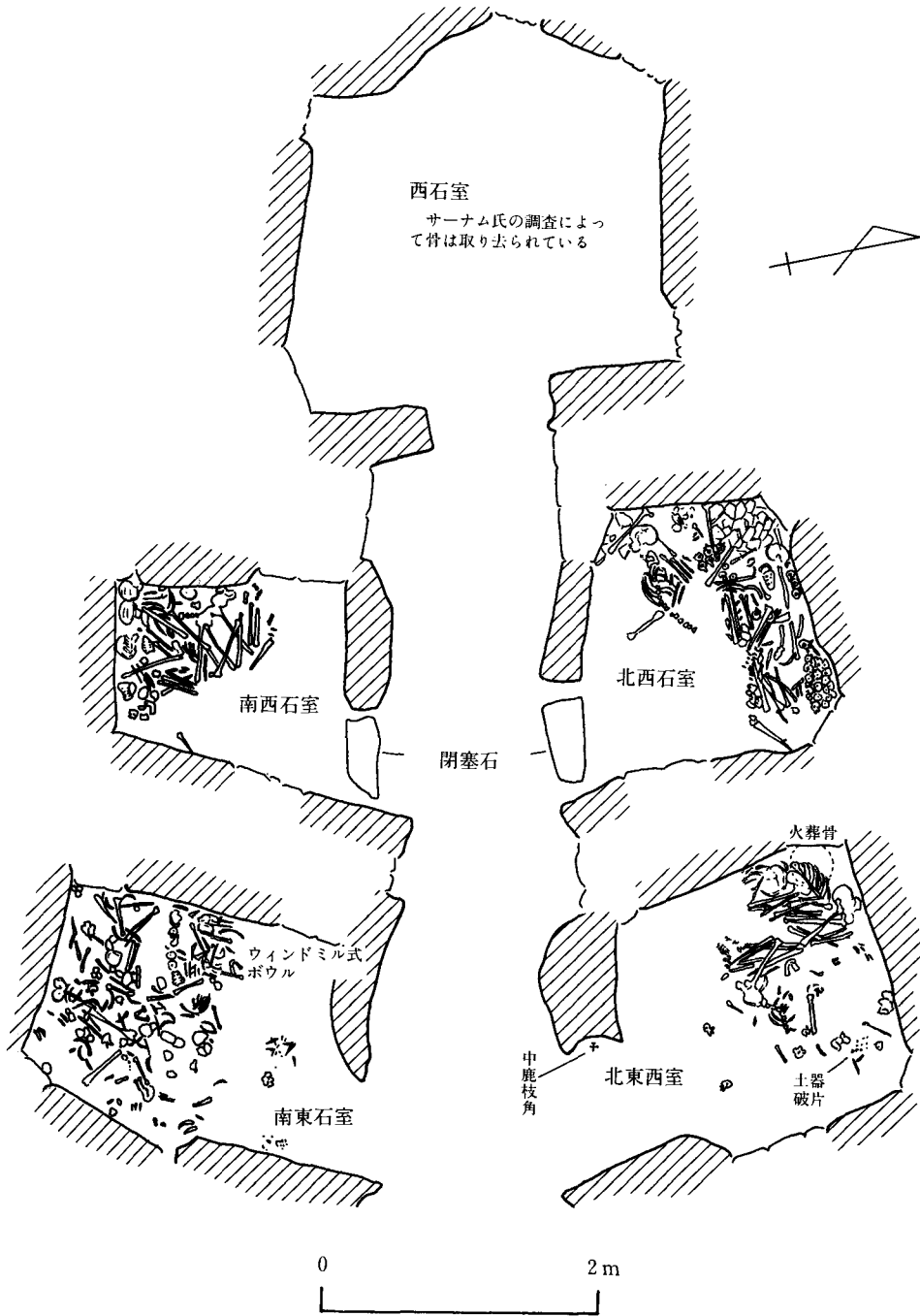


図10 ウェスト・ケネット長形墳石室内人骨，遺物出土状況〔Piggot 1962〕より加筆転載

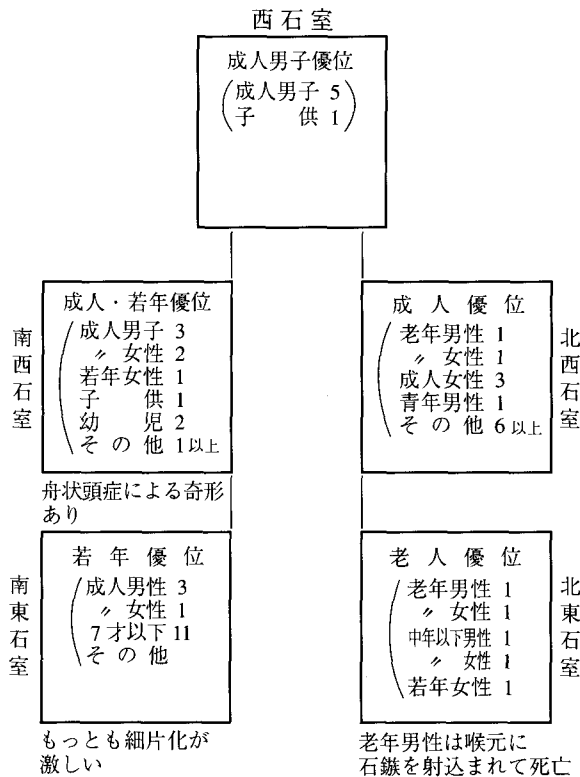


図11 ウェスト・ケネット長形墳石室模式図と出土人骨の特徴 (Thomas 1987) より加筆転載
北東石室のみ牛の骨が優位, 他の石室は羊と豚。

点がなおざりにされてきたことに対する反省にたったものである。

ニュー・アーケオロジーは、文化を人間の環境に対する身体的適応と捉え、死に関する人間の諸行動も適応という観点から説明する。たとえばビンフォードは、死に関する人間の諸行動を、死者に関する情報を生者に送るコミュニケーション・システムと考える。社会の内部がランクづけられていれば、ランクごとにコミュニケーション・システムが存在するはずなので、コミュニケーション・システムを分析すれば、社会におけるランクの違いを知ることができ、社会構造の解明につながると考えたのである (Binford 1971)。ビンフォードが死体の処置と社会システムを結びつけたことや、A.A.セイクスが年齢、性別、社会的地位、社会的友好関係、死の位置づけなどによって、遺体の処理法は異なると指摘したこと (Saxe 1970) が、ニュー・アーケオロジーにおける死の考古学の理論的基盤となるのである。死に関する諸行動を分析して社会構造の復原に迫ろうとした問題意識と、現代の縄文時代における墳墓研究の目的とはまさに一致している。

ここで3人の代表的な研究を紹介する。R.J.C.アトキンソンやI.キネスは、現実の社会に存在したヒエラルキーを死に関する諸行動のなかに読みとろうとした。そしてレンプリューは、巨石建造物の機能を分節社会 (Segment society) のテリトリーを示すマーカーとして位置づけた。

a [Atkinson 1960]

ブリテン島ウェセックス地方の新石器時代の墓は、首長制（チーフダム）社会の存在を示す証拠で、それらが群集していることは首長制の全王朝がそこに反映されていると考えた。このような社会には氏族間の戦争が認められるという。

b [Kinnes 1975]

長形墳や積石塚が墓ではないという認識をはじめて示した。これらの施設は人骨の保存と利用を本来の目的としたモニュメント（巨石記念物）であると規定し、とくに長形墳にはヒエラルキー・システムが直接反映されていると主張した。したがって共同体の全成員の骨がここに納められたのではなく、その一部が納められたにすぎない。納められた人々は土地を保有し共同労働を課す強制力をもっていた。モニュメントはこのような社会的に優位にたつ人が造り、保存したものと考えたのである。キネスの新石器時代観が農業社会であったことはいうまでもない。モニュメント自身も農業とともに大陸から持ちこまれた基盤のうえに造られたと考える。

c [Renfrew 1973a・73b・76]

レンフリーューは、ウェセックス地方の新石器文化を考えるなかで、長形墳の性格づけをおこなった。墓ではなくモニュメントと位置づけるのはキネスと同じである。

彼は首長制モデル（チーフダム）で新石器文化を説明した⁽¹⁵⁾。彼はまずウェセックスの新石器時代が移動式農耕を基本とする高度な農業社会であったという前提からはじめる。そしてチーフダム社会がもつという20の属性⁽¹⁶⁾がウェセックスに認められるかどうか検証する。もしウェセックスの新石器社会が首長制社会なら、これらの属性をみたく施設がないといけないわけだが、レンフリーューは長形墳や断欠周溝状遺構こそチーフダム社会にあるという社会・宗教センターと考えたのである。逆にいうと、新石器時代のウェセックス地方を首長制社会とするには、これらの諸施設を社会・宗教センターと考えるしかなかったのである。プロセス学派の演繹的な方法的特徴がここにみられる。

首長制社会の特徴の1つとされている、領域の専有権を示すモニュメント（長形墳など）や、そのようなものをもつ社会がなぜ西ヨーロッパに登場したのかという問に対して、次のように説明した。もともと西ヨーロッパにいた狩猟・採集民である中石器人と、新たに進出してきた農業民との間に生じた土地不足に端を発する緊張状態のなかで、自分達の共同体の結束を高め、アイデンティティを確認するための社会・宗教的行事の象徴としてモニュメントが登場したのである⁽¹⁷⁾と。なおレンフリーューは死者儀礼については言及していない。

B 人骨の意味論

ニュー・アーケオロジーの最大の貢献の1つは、墓地内の年令、性別、副葬品などの諸属性を多変量解析することによって、ある一定の共変するパターンをみつけ、過去の社会の階級制に関する議論を高めたことである。

プロセス学派が日本考古学に与えた影響はチャイルドほど明確ではないが、多変量解析などの

統計手法の導入は、'70年代後半以降、顕著になる。しかし最近では、多変量解析を使えばすべてがわかるといった誤った考えにたった研究もあるので、その功罪はあまりにも大きい。

(4) ポスト・プロセス期 (1980年代以降)

人間の行動にみられる文化象徴を重視し、それと社会・経済との相互の関連性に注目するI.ホッダー率いるポスト・プロセス学派が、プロセス学派に対する批判を展開した時期である。批判的は、考古資料のなかに国家論にもとづく部族や首長制を求め、国家を定義していく比較文化論的アプローチという方法論自身にある〔Hodder 1979〕。ポスト・プロセス学派は、プロセス学派が普遍性を強調するあまり、個々の考古学的データとその構造的性を軽視する傾向があることや、象徴性に対する不十分な対応、民族データの検証なき適用などを批判する。さらにプロセス学派が自分達の歴史的脈絡のなかでモニュメントの機能を考えていたと批判し、実際の研究においてはその当時の、モニュメントがおかれていた新石器時代という歴史的脈絡のなかで考えるべきだと主張した〔Hodder 1984〕。

A モニュメントの機能論

個々の資料の象徴性や構造的な部分の重要性は、ホッダーの場合、モニュメント自身に向けられる傾向がある。

まずモニュメント出現の理由について、農業の発達にともなう経済の増強と人口増大によってリネージの役割が高まり、競争集団に対して象徴性を高めるために出現したと考える〔Hodder 1979〕。このような認識の背景には、ホッダーがケニアでおこなった民族調査の成果がある⁽¹⁸⁾。

ホッダーの考える新石器時代社会はレンフリューと同じ農業社会であった。そして経済的側面から時代の画期を説く。このような史観は'79年のR.J.ブラッドレイとの共著の論文のなかに強く反映されている〔Bradley & Hodder 1979〕⁽¹⁹⁾。この論文はJ.ラボックによる技術様式論にねざした時代区分論以降、はじめて経済・文化構造による区分をおこなったという点で高く評価されている。

ホッダーはレンフリューらの方法論については批判しているが、一元的な農業発展の図式のなかでモニュメントの出現を考えていくという基本認識は同じであるといえよう。また民族誌をつかってそれを普遍化することはないが、社会的脈絡が同じと考えられる民族誌のデータは積極的に適用するのも特徴である。

他にも、モニュメントに関して、社会と重要資源との間の不均衡が原因として出現したというR.チャップマンらの説〔Chapman & Randsborg 1981〕、中央ヨーロッパの家を象徴的にうつしたというホッダーの説〔Hodder 1984〕にみられるように、'80年代は構造的・象徴的に捉える考えが次々に示された時期である。

B 人骨の意味論

新石器時代の人々が長方形石室墓を舞台におこなった死に関する諸行動を再解釈し、現在の研

究の方向性を決定した論文があらわれる。それは'50年代から指摘されていた、性別・年齢・関節が外れているかどうか、など骨にみられる対照性を象徴的に解釈する試みである。

a [Shanks & Tilley 1981]

M.シャックスとC.チリーは、新石器時代にみられる死に関する諸行動の再解釈をおこなった。長方形石室墓への納骨を二次葬とする考えは'50年代から指摘されていたが、二次葬の際にいろんな骨の置き方をすることによって、再秩序づけをおこなったと考える点に最大の特徴がある。再秩序づけこそ死者儀礼と考える彼らは、社会の秩序をイデオロギー的⁽²⁰⁾に正当化することをめざした。

彼らによると新石器時代の長方形石室墓を舞台におこなわれた儀礼活動は、3つの構造原理に支えられているという。まず石室内では「共同性」が重視されていて個人は無視される。しかし共同性は1つの地域集団内に限られるため、地域集団間には排他性が認められ、「区画性」によって墓地は区分されている。そして肢と身、上半身と下半身、右半身と左半身といった複数の対照性にもとづいて骨格は「再構成」される。このように新石器時代は、基本思想である共同性を重要視しながらも、地域集団間との関係はあくまでも排他的だったのである。この関係は社会的規制によって修正されていくが、その過程は複数の遺体の骨をつかって1体の社会的肉体を再構成する行為に表現されている。石室は、自然の存在である骨を文化的な産物に意味変換するための場として使われたのである。

社会は死の機会に乗じて、このような関係を確認しつづける。死は社会秩序を再生産し、正当化するための機会であって、モニュメントには均質な親族組織と不均質な社会規制との間にみられる対照性が象徴的に表現されているのである。

次に石室構造自体が人骨の配置を規定し、そこに象徴的な意味を求める研究を紹介する。

b [Richard 1988]

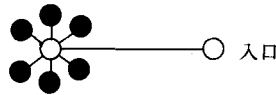
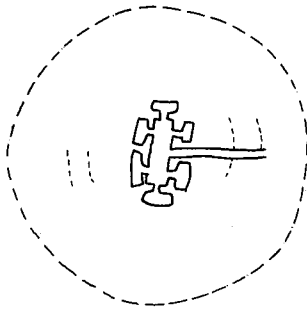
C.リチャードは、石室は象徴的な戦略にもとづいて造られたものなので、その戦略を解明すべきだと説く。死に関する行動が社会組織を反映したものであると考えないのは、ポスト・プロセス学派と共通している。彼はブリテン島の北に浮かぶオークニー諸島のオルカディアン(Orcadian)地域(図1)の石室墓を舞台に自説を展開した。

この地域には、墓道つき石室の一種である、長大な長方形石室内に間仕切りをもつ間仕切り形石室(stalled type)と、中央に大きな石室、そこから放射状に延びる回廊の先に方形の石室をもつ多孔質形石室(cellular type)という2つの平面構造をもつ石室がある(図12)。この平面形の違いを、生者の象徴的な戦略の違いに求めたのである。

まず間仕切り型長方形石室をもつクノウェ・オブ・ヤルソ遺跡(Knowe of Yarso)では、間仕切りで仕切られた最奥部の小室から下顎のない火をうけた頭骨が、壁際をぐるっとまわるような状態でみつかった(図13)。頭骨は小室の中央部を見つめるようにおかれていたという。また各間仕切りで区切られた小室には、長骨を中心とした多くの骨がバラバラの状態でおかれていた。

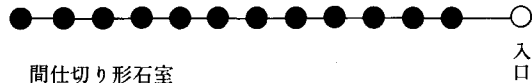
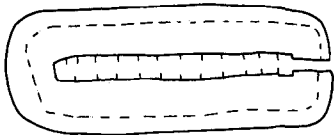
なぜこのような状況が現出したのか。これは新たに遺体をいれるたびに、それまでに葬られていた骨のなかから特定の骨を抜き取り、配置した結果だと考えられている。

追葬時は先葬者の死を確認する通過儀礼の場となる。この儀礼には祖先の参加が不可欠なので、先葬者の頭骨や長骨を祖先の魂の象徴として回収、最奥部の間仕切りの小室に運ぶ。石室内における骨の循環と呼ばれるこのような現象は、特別な祖先や、祖先の肉体的・精神的なものへ生者が接近することを象徴している。祖先の骨の統合や再配置こそ、儀礼のなかの本質的な部分だっ



多孔質形石室

それぞれの部屋には中央の部屋(○)を通らないと行けない。天井の高さは中央の部屋だけが高く、その意味では、中央の部屋が他の部屋に対して優位性をもっている。



間仕切り形石室

順をおってしか最奥の部屋に到達できない。各部屋の天井の高さは同じで、その意味では等質的である。

図12 Cellular タイプ石室と Stalled タイプ石室の実測図(左列)と模式図(右列) [Richards 1988より加筆転載] 空間配置の意味の違い。

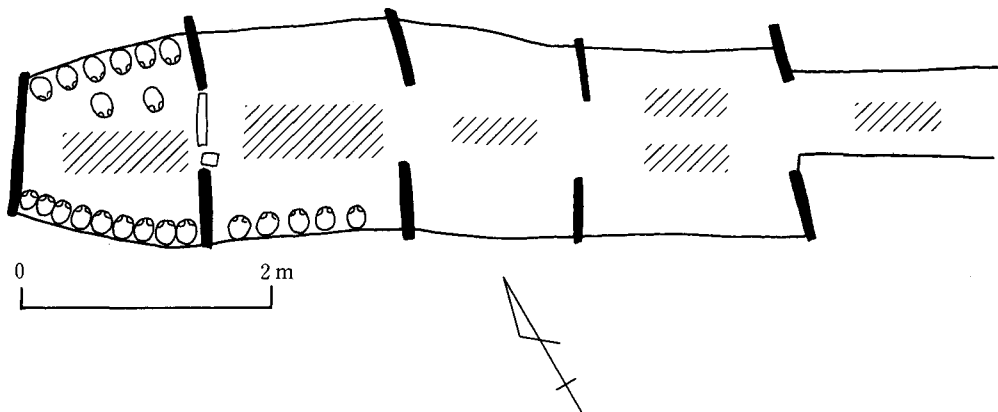


図13 クノウェ・オブ・ヤルソ遺跡(オークニー島) stalled type 石室内人骨出土状況

もっとも奥の部屋では、頭骨が壁にそって置かれ、しかも皆、石室の中央部を見ている。斜線部は、長骨を主体とする骨が集積されている部分である。

たと解されている。

つぎに多孔質形石室をもつクォンタネス遺跡(Quanterness)の中央石室では、5層にわたって骨の埋置がみられ、その数は300人以上にのぼり、期間にして800年間にわたっている。まず男性が屈葬される。次にその男性の墓壙に10代の女と子どもの骨が入れられる。そのあとこの部分を砂利で覆ってしまう。それから砂利のうえに、関節をはずした300人以上の骨を3～4層にわたって積み重ねるのである。

これらの骨には、いろいろな部位があり、しかも遺存状況はバラバラで、頭骨はほとんどなく、同一個人の骨が垂直的にも平面的にも広がっている。しかもどれ1つとして完全に1体分になるものはない。これらの骨はいろんなところから寄せ集められたものなので、特定の祖先との結び付きは一切絶ち切られている。

以上、この2つの石室の違いは、祖先と生者との関係が違うことにある。すなわち前者(間仕切り型)は、生と死の物理的境界を最小限化し、生者と祖先の間のかかわりを密接にしようという意図で造られたものである。それに対して後者(多孔質型)は、放射状の部屋に対して中央石室が重要視された構造になっていて、モニュメント的な意味が強調されている。初葬者の男性(完全骨)を砂利で隠蔽したうえで300体分以上の骨をバラバラにして累積させる行為は、異なる存在状況(コンテクスト)の組みあわせを意味する。つまり最初の屈葬された男性という祖先と生者との関係は断たれていて、生者は初葬者の男性を認識していない。

5. 現在の死の考古学研究(1980年代末～現在)

現在、死に関する諸行動の研究は、これまでとはまったく異なる新石器時代像にもとづいておこなわれている。それは新石器時代=農業社会という時代像の否定である。ポスト・プロセス期は、農業の発達と矛盾の増加、それを解決するための装置として死に関する諸行動を位置づけていた。しかし現在では、経済よりも儀礼に高い価値をおく新石器時代前期社会における、死の行動の意味を説く研究者があらわれている。儀礼が経済よりも重要視されていた社会とはどのような社会だったのであろうか。そのような社会ではモニュメントの機能、人骨の意味も大きく変化している。

現在の新石器時代研究を特徴づけている研究者の1人が先ほどから名前が出ているトーマスである。彼は、これまでの議論が遺跡や遺物から遊離しがちであった傾向を批判し、遺跡から得られる情報を強調しているせいか、本稿で整理の都合上設けてきたモニュメントの機能と人骨の意味という2本だての問題設定を必要としないので、以下、一連のものとして紹介する。

トーマスは、1987年に石室構造の違いを習俗の違いとする考えを発表する〔Thomas 1987〕⁽²¹⁾。これをさらに発展させて、1991年には新石器時代の前期と後期では石室でおこなわれた死に関する行動が変化すると説明した〔Thomas 1991〕。

彼は、それまで1つの長形墳や石室のなかだけで完結していた死に関する諸行動は、遺跡同士を結んだ一定の領域でおこなわれたものであるという考えを示した。たとえば断欠周溝状遺構と長形墳を一連の儀礼対象として連関させて説明したのである。つまり、新石器時代の社会の仕組み自体が、そのようなモニュメント間を結んでおこなわれた儀礼を中心に成りたっていたと説くのである。ことは石室内の骨の置かれ方にとどまらない。

儀礼は故人の血縁集団や同時代に生きて人々が共有していた「表現戦略」であって、儀礼によって死者を死の祭儀のなかにもどのように位置づけるかが決まる。表現戦略は社会ごとに異なっているので、プロセス学派的のように一般的な普遍性などはなく、ましてやそれにランキングや社会構造が反映されることはない。

それでは新石器時代の表現戦略とはどのようなものなのであろうか。しかも前期と後期ではどの点が大きく異なっているのだろうか。

まず前期社会では二次葬が一次葬より重視されていて、骨は二次葬に際して関節をはずされバラバラにされたあと、断欠周溝状遺構や長形墳などのいろんな施設に置かれ、しかもこれらの施設の間を循環するという。二次葬でもちいる骨は、汚い死体(肉)が腐敗した結果、クリーニングされた精なるものとして認識されている。この骨化(excarnation)は、通過儀礼と同じ意味もっている。このような新石器前期社会は等質的であった。

そもそも骨の循環は、'50年代にピゴットが指摘したものだが、それを前期の人々の表現戦略と考えたのである。それは農業儀礼の一環としておこなわれたのではなく、骨を循環させるたびに、すなわち断欠周溝状遺構や長形墳に納めるたびにおこなわれた。人々は集まり、嚮宴をすることが、この時代のもっとも大事な儀式だったのである。穀物栽培も家畜の飼養も、日常の食料源としてではなく儀礼や嚮宴でもちいるために栽培・飼養されたと考える。

このような等質的な前期社会も後期になると5つの変化があらわれる。等質性の消失⁽²²⁾、完全人骨の増加⁽²³⁾、新たな石室構造の出現⁽²⁴⁾、区分原理の登場⁽²⁵⁾、長形墳の前方と後方における2つの空間の顕在化⁽²⁶⁾という点に、トーマスは新石器社会の変質をみた。

これは農業の本格化にともない土地不足が起こり、資源の相続が重要な意味をもつ社会になるというホッダー以来の後期社会観が基本になっている。死者(祖先)との関係を正当化することで相続の正当性が確認されるのである。死者や祖先が現実の社会関係に直接かかわるようになるにつれ、祖先の役割が重要なものになるのである。

6. 縄文時代の死の考古学

(1) 研究史

1877年、E.モースが大森貝塚を調査した際、散乱人骨を発見したことに縄文時代の葬制研究はは

じまった。モースがこの骨を食人説とむすびつけたことはあまりにも有名である。縄文研究の当初は、縄文時代に属する確実な人骨はなかったが、次第に縄文時代に属する人骨が存在するという認識が広がってくる。明治40年代以降におこなわれた清野謙次らの一連の調査によって、埋葬状態・埋葬姿勢・格好などの「葬制」部分が明らかにされていった。これ以降、豊富にえられた実証例をもとにして縄文時代の埋葬習俗に関心をもった研究が60年代まですすめられてきたのである。1965年に刊行された『日本の考古学』をみても、いろいろな葬制の紹介についやされている〔西村 1965〕。一方、墓地の構成などの「墓制」研究がでてくるのは70年代からで、葬制に比べるとその遅れがめだつ。集落の方は、集落構成などの空間論的研究が戦後すぐにはじまっていることと比べてもかなり遅い。

60年代以前の葬制研究は、貝塚から出土するのこりのよい人骨を対象にしていたので空間論と結びつきにくかったり、調査者である形質人類学者の関心が縄文人の形質の特徴の解明、ひいては日本人の系譜論へと向かっていたこともあって、空間論的研究は遅れたのである。

このような縄文時代の死の考古学研究が転換するのは、大規模開発にともなって貝塚以外にも墓地遺跡の全面発掘がおこなわれるようになってからである。貝塚を中心におこなわれていた調査ではわからなかった、墓地構成がわかるようになったことで墓制研究が本格化したのである。

縄文時代の人骨は基本的に墓から出土するので、死者儀礼という意味での祭りの場と、葬る場は墓に付属している。したがって縄文時代のモニュメント（巨大木柱列遺構・環状盛土遺構）で人骨が使われた例はまだ知られていない。それに対して新石器時代ブリテンの死の考古学はモニュメントから出土する骨を対象におこなわれているので、墓制研究はすすまざ葬制中心の研究になってしまうのが現状である。ブリテン新石器時代研究に葬制研究はあっても墓制研究がないのはこのような理由からである。

(2) 縄文時代の墓制

縄文時代の墓は時期・地域ごとの変異がブリテンとは比較にならないほど多いが、基本は単純である〔小杉 1995〕。1つの土壌墓に1人を葬る個人墓が墓制・葬法の基本で、埋葬姿勢には屈葬と伸展葬がある。共同墓地の基本単位は一次葬としての個人墓である。それに対してブリテン新石器時代前期は、二次葬の合葬（collective tomb）が基本で、別の場所で骨化させた複数の人の骨のなかから特定の部位骨を選択し、寄せあつめて、長方形石室などに置く。埋めることはしない。一次葬としての個人墓の出現は新石器時代の後期である。日本では個人が重要視されるが、ブリテン新石器時代前期に個人が丁重にあつかわれることはないのである。

日本列島に墓が出現するのは旧石器時代の終わり、北海道・湯の里4遺跡からみつまっている〔北海道埋蔵文化財センター 1985〕。墓は縄文時代の草創期にはすでに普遍的になっていたという説もある〔田中 1992〕。

大形の共同墓地が出現するのは前期前葉から中葉にかけてで、豊かな堅果類をメジャーフード

とする定住生活が始まる時期とほぼ一致する。これはブリテンの新石器時代のはじまりともほぼ同じ時期であることは興味深い。共同墓地のなかには1000年以上にもわたって営まれたと考えられるものもあるが、これは1つの集団がこの場所からまったく動かず、ずっとはりついていたことを意味するわけではない。一定の土地への定着性を強めながらも、一定地域内で移動をくりかえしたり、離合集散をくりかえしていた可能性のほうが高いと考えられている〔林 1995〕。生業形態は異なるが一定のテリトリー内を移動しながらも恒久的なモニュメントに骨を置きつけたブリテン新石器時代前期と同じといってもよい。定住というと1ヶ所にずっとはりついていたイメージしがちだが、考古学で重要視する定住とは、一定の広がりをもつ土地と一定の期間、かかわりをもつことであって、どこに住んでいようがそれは問題でない〔林 1995〕⁽²⁷⁾。

この時期の共同墓地は岩手県西田遺跡に代表されるように集落と分離していない。生活の場と埋葬の場を隣接させるのが基本である〔大塚 1979〕。その配置は、集落の中心に墓がありそのまわりに居住域を環状に巡らすものである。墓地の中心にはすでに核となる中心埋葬があり、二重構造となっている〔設楽 1994〕。生者と死者は同じ空間に同居しているのである。

しかしやがて大きな変化がおとずれる。すなわち墓は集落とは別のところに営まれるようになり、生活の場と埋葬の場が分離する。また埋葬が集中しておこなわれる特定の区域が出現〔大塚 1979〕し、一定の空間に一定数の遺体を集中させるとともに、一定の地域があらかじめいくつかの地片(埋葬区)に区画された区域が出現する〔林 1980〕。すなわち墓域の出現である。墓域が出現する時期には、大塚の中期後葉説と林の後期中葉説がある。墓地と集落の分離、墓域の出現の意味に関する研究はあとで紹介する。

再葬は早期中葉からはじまるが、後・晩期にいたっていちじるしく増加する。ただしその場合でも1つの墓地における再葬の割合はごくわずかであるという。あくまでも主体は一次葬の個人墓なのである。

再葬はきわめて特徴的な遺構なので考古学者の目にふれやすい。盤状集積・土器棺墓・火葬・合葬墓など。なぜこのようなことがおこなわれたのか議論はつきない。

(3) 縄文時代の「死の考古学」研究の特徴

A 生の世界と死の世界は同じ原理をもつ

縄文時代の墓制研究は、生の世界の原理が墓地にストレートに反映されるという前提でおこなわれていることが特徴である。集落を維持・運営する人間のきずな・組織を復原するところみを、抜歯様式や葬制などを手掛かりにおこなうという林の発言〔林 1984: 18〕や、「生者の生活構造が死者の墓地構造にも反映しており、死者の生活は生者の生活のある程度の延長と考えて墓地を設計したことがうかがえる〔設楽 1993: 8〕という言葉に端的にあらわれている。このような考えは縄文時代に限らず、弥生時代の墳墓研究でも共通している。おそらく和島誠一や水野正好以来の、住居跡群を血縁集団、共同体理論のレベルで解釈する集落論の流れと無関係ではなく、

墓制研究でえられた成果を集落論に利用していく意図がうかがえる。

生の世界を死の世界に直接反映させたという大前提のもと、林と春成は墓地構成の原理をめぐる一連の研究をおこなった〔林 1977・1980〕〔春成 1980・1983〕。林の葬制研究の目的は先に述べたとおりだが、墓域を研究することで造営に関与した人々の社会的認識に迫ることができるという考えのもと、墓域から当時の人々のメッセージをよみとることに最大の関心をもっていた。しかし墓域にメッセージとしてこめられた社会的認識が、当時の生者の社会の構造や組織をそのまま反映しているかどうかは、ブリテン考古学史でみてきょうに別問題と考えることもできる。

春成の墓制論は3つの部分から立論される。まず墓墳の平面分布と副葬品の保有状況をもとに、縄文時代の墓制が双分原理によって2群にわかれていることを認める。ここまでは林と同じである。次に抜歯人骨を検討して先の2群と抜歯様式が対応することから、出自と双分原理をむすびつける。最後に各群における男女のあり方から居住規定を推論する。縄文時代後半の墓制が3分ないしは不均等双分現象に変化することについては、従来からみられる出自意識に、1居住集団の内部における世帯の相対的自立が加わった原理に規定されていたとする。これは、1つの墓域が多数の埋葬区に分割されている考古学的な現象と、1つの居住集団が継続的に墓域を使用していた結果と認めたいうえでのことであって、もし複数の居住集団が墓を使用した結果であると考えれば、また別の解釈も可能となる。

以上をまとめてみると、林は、縄文時代の墓制が2段階に変化することを認め、双分原理から3分ないしは不均等双分の原理へ変化するとした。林の抽象的な2段階区分に対して春成は、抜歯様式と男女分布をもとに出自・婚後居住規定という具体的な原理を提示したのである。ここに縄文時代の墓制は出自別墓制から世帯別・出自別墓制へと変化・移行するという大枠が決定されたのである。さて、はたしてこの大枠は、生の世界でも同じだったのであろうか。

墓地構成にこめられた原理のキーワードは、常に和島誠一以来の命題である、世帯共同体がいつ相対的に自立するかという経済的な位置づけと、出自という血縁的位置づけで説明されてきた。そこには水野が否定しなかった縄文社会の階層⁽²⁸⁾という社会的な位置づけがなかったことに注意する必要がある。

文化人類学者は、縄文時代にみられる環状列石や巨大木柱列遺構などのモニュメントを、すでに再分配経済の段階に達した社会があったことを示す証拠とみている〔小山 1993〕〔佐々木 1991: 188-189〕。彼らは縄文時代を特定の個人に財や女が集中し、貧富の差があり、階層化した社会と考えているのだ。小林達雄も、縄文時代の経済力や共同墓地からみつかると多くの副葬品をもつ遺体からみると、縄文社会は身分階層が存在したとみていいと述べている〔小林 1987〕。

ブリテンのモニュメントはまさしく文化人類学者のいっている性格をもつ遺構で、そこから多量の人骨が、いろいろな出方をするのである。縄文時代に階層があったかどうかの議論は今後おおいにすすんでいくであろうが、墓・葬制に格差がみられないからといって、生の世界における階層制の存在を否定することはできない。現世の階層制が墓制にメッセージとしてこめられると

は限らないし、逆に現実に階層制があっても墓には等質的な社会であることをメッセージして託す場合も民族例では数多く知られているからである。今後、墓制原理の追及にあたっては現世の社会組織や構造が、直接、墓制に反映されないこともあることを念頭におきながら、血縁(出自)という生物的な地位、階層という社会的な地位、世帯共同体の自立という経済的・生産的地位の3軸で墓制を解釈していかなければならないであろう。

つぎに縄文時代の墓制にみられる画期を境に再生観・祖先観・他界観はどう変化したのであるうか。

B 再生観・祖先観・他界観

縄文時代の再生観念は、伸展葬・屋内甕棺葬・再葬・焼人骨葬・中空土製品の一部・土偶・副葬品が登場するようになってしまったと説かれてきた〔小杉 1995:111〕。再生観念の議論はすでに指摘されているように、それが他界での再生か現世での再生か、明確にわけた議論がおこなわれなかったところに特徴がある。祖先の国や神の国へ行ってしまって帰ってこないという来世観は、縄文時代にさかのぼらないのであろうか。この問題は他界観のところでもふれてみたい。とりあえず再生観をもっとも端的にあらわすと考えられている再葬を例に考えてみよう。

再葬は合葬・火葬・土器棺葬・集骨葬という特徴的なかたちで遺跡にのこされるので目につきやすいが、縄文の葬制のなかでは、地域や盛期をむかえる時期に限られるマイナーな存在である。設楽は再葬がでてくるメカニズムを、血縁的なつながりを重視し維持する縄文社会の根本原理に求める〔設楽 1994:38〕。縄文社会の基本原則と考えられている出自を重視する立場にたった意見で、集骨は祖先を中心とした紐帯が明瞭化していったあらわれとしてとらえられ、祖先観とも連動している。生の世界も死の世界も血縁関係=出自にしばられ、出自をもっとも重視する社会であったという縄文社会観にねざしている。

しかしなんのために血縁的なつながりが重視されたのかの説明ははっきりしない。血の結束をほこることで何のメリットがあったのか。生者が祖先の骨を再葬することによって発信したメッセージとは何なのであろうか。

こういう場合、ブリテンでは、資源と祖先というキーワードで説明する。プロセス学派は人口圧にともなう資源不足、ポスト・プロセス学派は労働力と土地との関係からくる資源不足、とそれぞれ契機は異なるが、資源の不足を打開するために祖先の力を利用して、資源の正当な継承権を主張するという点では一致している。このようにみると離合集散をくりかえしていた縄文人ではあっても、1000年以上も同じところに墓や集落を造りつづけていたということは、彼らが食料獲得の場とする森林や河川を、彼ら自身のものとして認識し、また他の集団からもそこが特定の集団のものとして認識されていたことは十分に考えられる。この特定の集団の領域であるという認識を対外・対内的に周知させる手段として祖先を重視し、出自を明確にして資源の継続的な使用権を主張する戦略がとられたと考えることもできよう。ただこれはあくまでも、墓域の造営主体が単独の居住集団に限定されていたと仮定した場合のことである。

また骨から肉をそいだり、焼いたりする行為をとまなう二次葬に大きな労力をかけることには2つの意味がある。文化人類学では父系社会か母系社会かによって二次葬の意味が異なるとされている。父系社会の場合、二次葬は骨・秩序・社会の継続性と関連する永続的な意味をもつ。一方、母系社会の場合、二次葬は肉・官能性・個人の死という非永続的な意味をもつ。縄文時代は、土壇墓への単葬を基本とした個人重視の墓制であったが、晩期になると一部の地域で再葬が盛んになった背景には、すでに説かれているような父系社会の出現があるのかもしれない。

盤状集積は、まさにその地域にみられる二次葬の遺構である。これは特定の選ばれた骨をつかって独特の置き方をしたもので、それにこめられた意味は興味深い。たまたま出てきた骨でつくったとは到底考えられない。盤状集積につかわれた骨が帰属する複数の人の血縁関係、1個人の骨がどのように組みあわされているのか、などの解析をとおして、縄文人が死者に対しておこなった再秩序づけを評価しなければならない。自然の存在である骨が、盤状集積という行為をつうじて文化的産物に意味転換された結果、別個の社会的人格として生まれ変わっている可能性があるからである。

他界観念は墓域と居住域との分離がおこったときに成立したという説がある〔大塚 1979〕。また再生と他界観との関係も再考する必要がある。民族例には、死を祖先の国へと仲間入りする機会と認識する場合も多い。仲間入りするための通過儀礼が再葬という行為なのである。魂は遺体が完全に白骨化しないと祖先の仲間入りはできない。遺体から不浄な肉をとりさり完全に白骨化させたあと、魂を祖先の国へ送るための行為が再葬なのである。これは再生、祖先観、他界観が相互に関連し密接な関係にあることを示している。

祖先観にも2つある。春成は直接・経験的に認識できる祖先と、間接・観点的な超世代的な祖先の2つを定義し、時間的に前者から後者へ移行すると述べた。これは墓域の担い手が単一の血縁集団か、それとも複数の居住集団を含んだ地域集団なのかという空間軸と、短期間の造営かそれとも長期にわたる造営かという垂直軸（時間軸）の関係によって規定されてしまう。血縁集団以外の集団が担い手としてはいたり、あまりにも時間的にさかのぼってしまうと、観念的・間接的祖先観になっていく。小杉は大規模配石記念物の成立に祖先観念の形成を求め、祖先祭祀の成立を予測している〔小杉 1995〕。

ブリテンでも5. で説明したように、祖先である男性の墓壇を土などで完全に密封し、そのうえにあらたな埋葬を開始していることをもって、経験的祖先観から観念的な祖先観へ転換したといわれている〔Richard 1988〕。

墓制・葬制に大変革がおこる縄文後期社会には何があったのであろうか。1つは環境の悪化にともない資源の確保が難しくなり、生者と死者の関係が変化したと考えられることである。先祖を重視する観念は、現実の社会関係に祖先がかかわる必要性が高まった社会とともに出てくるものと思われる。困ったときの祖先頼みともいえようか。

7. おわりに

日本列島とブリテン島。ユーラシア大陸の東と西の端にある島嶼部の新石器時代における死の考古学を概観してきた。縄文時代に比べると、ブリテンの新石器時代の遺跡はあまりにも種類が偏っているために、その解釈も極端にはしるきらいがある。新石器時代前期の遺跡が本当にモニュメント的なものしかなく、トーマスが説くように、そこでおこなわれていた儀礼活動が経済活動より上位におかれていた社会だったのかどうか、結論をくだすには性急であってはならない。

現在のブリテン考古学にみられる流れは、考古学のみならず社会や世界が経済優先の考え方にとらわれていることに対する反省とみることもできよう。新石器時代の人々が何を考え、どのような主義・主張にしたがって活動し、遺跡や遺物をのこしたのか、それを解釈するのは現在の考古学者である。ブリテンの考古学者は日本のように大量の遺跡や遺物の資料化と分析に追われることがないので、実証的な研究にのめり込むことなく、解釈論にしのぎをけずってきた。解釈にあたっては主観を徹底的に排除し、人類史一般の普遍性を求めようとして、個々の民族の個別性や象徴性を顧みなかったプロセス学派。その反動で個別性を重視するあまり古代人の心や認識論まで踏み込んだことで実践がついてゆかず、もはや考古哲学を樹立するしかないといわれるポスト・プロセス学派。そして経済優先主義からの脱却を説く現在の研究。ブリテン考古学は、パックス・ブリタニカの時代にはじまり、資本主義と社会主義という2大イデオロギーの時代（2つの普遍性）や、民族の自主・独立が強調される時代をへて、地球が限りある惑星であることに気づき、経済優先の大量消費・環境破壊の反省にたつ現在にいたっている。まさに近・現代社会の歴史と連動した動きをとってきたといっても言い過ぎではないだろう。日本考古学もその精緻な実証主義を最大限にいかして、社会の流れにあわせた発展を考えるべきときにきているのではないだろうか。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

本稿は私のケンブリッジ大学留学中にふれた死の考古学に関するブリテン考古学の一端を紹介したものである。留学の目的は、当初、日本考古学の実証主義を駆使して、ブリテン新石器時代に起こったとされる農業への転換期を研究することであったが、あまりの人工遺物の少なさに愕然とし、文献中心の研究にはいらざるをえなかった。資料が少ないと理論でやるしかないのかと思いつつも、理論と実践の両立を模索した10ヶ月であった。残念ながらその結論はまだみえてこない。その間、同じく留学中であった小林達雄・宇野隆夫両先生との議論や、留学生であった深沢百合子・溝口孝司・細谷葵・高宮いずみさんとの討論をつうじて啓発された部分は数限りない。また設楽博己さんや溝口さんには縄文時代やブリテン新石器時代の死の考古学に関する現状を教えていただき、文献も紹介していただいた。また春成秀爾先生をはじめとする国立歴史民俗博物館の諸先生には多大なるご助言をえた。ここに記して感謝の意を表したい。

(1995年3月30日稿了)

参考文献

- 有光教一 1962：権力の発生と民族移動—西ヨーロッパの新石器時代と金石併用時代—。世界考古学大系—ヨーロッパ・アフリカ。先史時代—：89-101。平凡社。
- 大塚和義 1979：縄文時代の墓制。日本考古学を学ぶ3：36-44。有斐閣。
- 小杉 康 1995：縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓祭」制の構造と機能—。駿台史学93：101-149。
- 小山修三 1993：狩猟採集時代の生活と心性。岩波講座日本通史2—古代1—：107-142。岩波書店。
- 小林達雄 1987：縄文時代の経済力。学燈。丸善。
- 佐々木高明 1991：日本史誕生。集英社版日本の歴史1。集英社。
- 設楽博己 1991：最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—。国立歴史民俗博物館研究報告36：195-238。
1993：縄文時代の再葬。国立歴史民俗博物館研究報告49：7-46。
1994：壺棺再葬墓の起源と展開。考古学雑誌79(4)：1-40。
- 田中英司 1992：縄文草創期の墓—器物の配置と撒布—。考古学研究39(1)：29-57。
- 都出比呂志 1989：『日本農業社会の成立過程』岩波書店。
- 角田文衛 1962：古代ヨーロッパの高城。古代史講座2—原始社会の解体—：49-90。学生社。
- 西村正衛 1965：埋葬。日本の考古学II—縄文時代—：335-352。河出書房新社。
- 林 謙作 1977：縄文期の墓制第II部遺体の配列、とくに頭位方向。考古学雑誌63(8)：211-246。
1980：東日本縄文期墓制の変遷（予察）。人類学雑誌88(3)：269-284。
1984：縄文の集落—集落論の新しい出発をめざして—。季刊考古学7：14-19。
1995：縄文時代史24—縄文人の集落(4)—。季刊考古学50：109-116
- 春成秀爾 1980：縄文合葬論—縄文後・晩期の出自規定—。信濃32(4)：303-337。
1983：縄文墓制の諸段階。歴史公論9(9)：40-51。
- 藤尾慎一郎 1994：ブリテン新石器時代と縄文時代。考古学研究会40周年記念講演発表要旨。東京。北海道埋蔵文化財センター 1985：湯の里遺跡群。
- 八幡一郎 1959：新石器時代。世界史大系1—先史時代—：381。誠文堂新光社。
- Atkinson, R. J. C. 1960: *A statistical consideration of the Wessex Culture*. Lecture delivered to the CBA Bronze Age Conference. London.
- Barrett, J. C. 1988: The living, the dead and the ancestors: Neolithic and early Bronze age mortuary practices. In: Barret, J. C. & Kinnes, I. A. (eds.) *The Archaeology of Context in the Neolithic and Bronze Age*, 30-41. Sheffield Department of Archaeology and Prehistory.
- Bellows, J. 1957: *The Eye Goddess*. London. Phoenix House.
- Binford, L. 1971: Mortuary practices: their study and potential. In: Brown, J. A. (edi.) *Approach to the Social Dimensions of Mortuary Practice*. Memoir25 Soc. *American Archaeology*: 6-29.
- Bloch, M. & Parry, J. 1982: Introduction: death and the regeneration of life. In Bloch, M. & Parry, J. (eds) *Death and the Regeneration of Life*: 1-44. Cambridge. Cambridge University Press.
- Brothwell, D. 1971: Forensic aspects of the so-called Neolithic skeleton Q1 from Maiden Castle, Dorset. *World Archaeology* 3: 223-41.
- Bradley, R. J. & Hodder, I. 1979: British prehistory an integrated view. *Man (N.S)* 14: 93-104.
- Chapman, R. & Randsborg, K. 1981: Approaches to the archaeology of death. In: Chapman, R. Kinnes, I. & Randsborg, K. (edi.) *The Archaeology of Death*: 1-24. Cambridge. Cambridge University Press.
- Chesterman, J. T. 1977: Burial rites in a Cotswold Long Barrow. *Man*12: 22-30.
- Childe, V.G. 1925: *The Dawn of European Civilization*. (1st. edi) . London. Kegan Paul.
1949: *Prehistoric Communities of the British Isles*. (3rd. edi.) London & Edimburgh.
1950: *The Dawn of European Civilization* (5th. edi) : 208-24. London. Routledge Kegan paul Ltd.
1957: *The Dawn of European Civilization* (6th. edi) . London. Routledge & Kegan paul LTD.

- Crawford, O.G.S. 1925 : *Long Barrow of the Cotswolds*. Gloucester.
- Daniel, G. E. 1950 : *The Prehistoric Chamber Tombs of England and Wales*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Grimes, W. F. 1939 : The excavation of Ty-isaf Long Cairn Brecknockshire. *Proceeding of Prehistoric Society*6 : 119-42.
- Hodder, I. 1979 : Economic and social stress and material culture. In : Hodder, I. (edi.) *The Spatial Organisation of Culture* : 199-269. London. Duckworth.
- 1984 : Burials, houses, women and men in the European Neolithic. In : Miller, D. & Tilley, C. (edi.) *Ideology, Power and Prehistory* : 51-68. Cambridge. Cambridge University Press.
- 1990 : Ta, omg fje damdseape : changing idioms of pomen in the Neolithic of Lowland Britain. In : Hodder, I. (edi.) *The Domestication of Europe : Structure and Contingency in Neolithic Societies*. London. Basil Blackwell.
- Hodder, I. & Shand, P. 1988 : The Haddenham long barrow : an interim statement. *Antiquity*62 : 349-53.
- Huntington, R. & Metcalf, P. (edi) 1979 : *Celebrations of Death : The Anthropology of Mortuary Ritual*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Kinnes, I. 1975 : Monumental function in British Neolithic burial practices. *World Archaeology*7(1) : 16-29.
- Madsen, T. 1979 : Earthen long barrows and timber structures : aspects of the early Neolithic mortuary practice in Denmark. *Proceedings of the Prehistoric Society*45 : 301-20.
- Malone, C. 1989 : *English Heritage : Book of Avebury*. London. B. T. Batsford Ltd. & English Heritage.
- Marsden, B. M. 1989 : *Prehistoric Britain : History in Evidence*. Hove. Wayland. Ltd.
- Megaw, J.V.S & Simpson D. D. A. 1979 : *Introduction to British Prehistory : from the arrival of Homo sapiens to the Claudian invasion*. Leicester University Press.
- Molleson, Theya 1981 : The Archaeology and Anthropology of Death : what the bones tells us. In : Humphreys, S. C. & King, Helen (edi.) *Mortality and Immortality : the anthropology and archaeology of death* : 15-32. Chicago. Academic Press.
- Montelius, G. O 1899 : *Der Orient und Europa*.
- Nichol, J. 1983 : Evidence : *Prehistoric Britain*. Oxford. Basil Blackwell Ltd.
- Passmore, A. D. 1938 : Excavation of an Untouche Chamber in the Lanhill Long Barrow. *Proceeding of Prehistoric Society*5 : 122-50.
- Piggot, S. 1954 : *The Neolithic Culture of the British Isles : A Study of the Stone-using Agricultural Communities of Britain in the Second Millennium B.C*. Cambridge. Cambridge University Press.
- 1962 : *The West Kennet Long Barrow : Excavations 1955-56*. Ministry of Works Archaeological Reports4. London. Her Majesty's Stationery Office.
- 1965 : *Ancient Europe : from beginnings of agriculture to classical antiquity*. Ejinburgh at the University Press.
- Pryor, F. 1976 : A neolithic multiple burial from Fengate, Peterborough. *Antiquity*50 : 232-33.
- Renfrew, A. C. 1973a : Monuments, mobilization and social organization in neolithic Wessex. In : Renfrew A. C. (ed.) *The Explanation of Culture Change* : 539-58. London. Duckworth.
- 1973b : *Before Civilization : the radiocarbon revolution and prehistoric Europe*. Jonathan Cape.
- 1976 : Introduction. *Changing Configurations : British Prehistory- A New Outline*. (2 nd) London. Duckworth.
- 1981 : *Introduction : the megalith builders of Western Europe*. In : Renfrew, A. C. (edi.) *The Megalithic Monuments of Western Europe* : 8-17. London. Thames and Hudson Ltd.
- Richards, C. C. 1988 : Altered Images : A re-examination of Neolithic mortuary practices in Orkney. In : Barret, J. C. & Kinnes, I. A. (eds.) *The Archaeology of Context in the Neolithic and Bronze Age : recent trends* : 42-56. Sheffield. Department of Archaeology and Prehistory.
- Saxe, A. A. 1970 : Social dimension of mortuary practices. (Ph. D. thesis, University of Michigan) Ann Arbor, University of Microfilms.

- Shanks, M & Tilley, C 1981 : Ideology, symbolic power and ritual communication : a reinterpretation of Neolithic mortuary practices. In : Hodder, I (edi) . *Symbolic and Structural Archaeology* : 129-54. Cambridge. Cambridge University Press.
- Savory, H. N. 1956 : The Excavation of The Pipton Long Cairn Brecknockshire. *The Journal of the Archaeologia Cambrensis* 105 : 7-46.
- Thomas, J. & Whittle, A. 1986 : Anatomy of a Tomb-West Kennet revisited. *Oxford Journal of Archaeology* 5(2) : 129-56.
- Thomas, J. 1987 : The social significance of Cotswold-Severn Burial practices. *Man* 23 : 540-59.
1991 : *Rethinking the Neolithic*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Ward, J. 1915 : The St. Nicholas chambered tomb, Glamoram. *Archaeologia Cambrensis 6th series* 15 : 253-320.
- Watson, J. L. 1982 : Of flesh and bones : the management of death pollution in Cantonese society. In : Bloch, M. & Parry, J. (edi.) *Death and The regeneration of life* : 155-86. Cambridge. Cambridge University Press.

註

- (1) 「間欠」とは時間が断続的であることを意味するので不適であるという佐原真氏の教示にしたがい、断欠と呼ぶ。集落と考える説については、最近そうは考えない説もでてきているので採用しなかった。
- (2) 邦訳は、八幡一郎による〔八幡1959〕。
- (3) 邦訳は、有光教一による〔有光1962〕。
- (4) 主な地域型のうち5つを図示した(図6)。
セヴァーン・コツウォルド群 (Severn-Cotswold groups) (図6-3)
長方形石室墓の一種を内部主体にもち、台形または長方形の長い墳丘をもつ。墳丘の片端に石でつくったファケード (facade) をもつ。
クライド群 (Clyde group) (図6-4)
長方形または台形の積石塚。壁高の半分くらいの高さの板石で石室が分割された小石室をもつ。間仕切り式長方形石室 (Segmented gallery graves) ともいう。前庭部にファケイド (facade) (図6-5) をもつ。
オークニー・クロマティー群 (Orkney-Cromarty-Hebridean group) (図6-7)
スコットランドにおける墓道つき石室の主要な形態である。円形ケルンの内部主体である。
バーグレンナン群 (Bargrennan group) (図6-6)
円形ケルンの内部主体で、小形の墓道つき石室である。
クラバ群 (Clava group) (図6-8)
円形の石室をもつ墓道つき石室で、重い縁石をもつ巨大な円形積石塚の内部主体である。積石塚の周囲には、さらに3 m~5 m はなれて円形列石がめぐる。ネス湖東方に位置するインバネス地方のリングケルンは、これに対応している。
- (5) ウィルトシャー州にある研究史的にも有名なウェスト・ケネット長方形石室墓を紹介する。この巨石墓はアーヴェリー群に属する巨石墓である。東西に主軸をもつ全長100m、高さ3.7mの長大な墳丘をもち、東側の端に長方形石室を開口する(図7・8)。墳丘内には巨石でつくられた長方形石室をもつ(図9)。墳丘の両側にはそれぞれ1本の溝をもつ。その規模は深さ1.5~2m、幅7mで、墳丘とほぼ同じ長さをもつ。
- (6) [Ward 1915] 継続埋葬説 (successive burial theory) は、遺体を納めるたびに墓が開けられ、その際、前からある骨を脇へ寄せたり、足で踏んだりするときに、骨が混ざったりバラバラになったりするというものである。そしてわずかにみられる関節のつながった完全な骨は、一番最後に納められた遺体と考える説である。
- (7) [Crawford 1925] 納骨堂説 (the ossuary theory) は、死人がでると、遺体を納骨堂や骨の家などの一時的な保管場所に仮安置しておき、ある程度、死体がたまったら石室をつくり、そこにすべて再埋葬するというもの。実際には、すでに埋葬されていたものや、どこか別の場所でさらされていた骨を集めるかたちをとる。集骨時や移動時に骨が混ざったり、失われた結果、このような出方をするという説である。
- (8) 殉葬墓説 (human sacrifice chieftain theory)。石室は首長のためにつくられ、一緒に葬られた多くの人々

は、あの世についていく夫人や親戚達、もしくはあの世で首長に仕える奴隷達と仮定する説である。首長の遺体だけは関節がつながった状態でのこり、そのほかの骨は打ち壊され、バラバラになってしまったというもの。

- (9) この時代に発達するもっとも重要な考えは、空間分析という地理学的アプローチにもとづいた文化概念である。チャイルドは、「ある伝統をもつコミュニティはその構成員に対し共通の行動をとるように要求するので、結果として標準的なタイプが作られる。考古学は、このタイプをある集団の埋葬様式として認識できるのだ」とした(Child 1925)。この考えは、3時期区分法の限界を打破したという意味で功績が大きいといわれている。そしてこのタイプの変化や発達、人の移動や接触・交流のいずれかが原因で起こると考え、思想や変革は伝播によっておこなわれるという考えを定着させるにいたった。
- (10) キリスト教の教会やイスラム教のモスクと同様の機能を巨石墓に求め、信条や信念が征服・福音伝導・熱狂と流行・聖人や商人によって伝えられ広められた結果、巨石墓が造られたと考えた。
- (11) 高身長、高頭の人々がフランスやスペインの大西洋沿岸から農業と牧畜とともにやってきて、巨石墓を造営したと考えた。
- (12) 彼は、この事態が何を反映したものを考察した。埋葬された大量の人骨は、一度に埋葬されたのか(single collective burial)、それとも何回にもわけて埋葬された累積の結果(successive collective burial)なのかについて検証した。まず合葬墓内の状況を次のように整理する。すべての骨を一度に石室内に入れるには限界をこえているし、性別・年齢などにまとまりもみられない。しかも無秩序に分散した置かれ方で、骨はほとんど打ち壊されている。なかには完全に揃った骨もあるが、これらは入口付近で見つかる例が多い。ダニエルは、結局、納骨堂説(the Ossuary-theory)を採用する。これは、死人がでると死体は一旦、納骨堂に仮安置しておき、ある程度死体がたまってきたら長形墳を築き、そこにすべてを再埋葬するというものである。納骨堂の具体像としては、すでにどこか他の場所にあった埋葬所や、別の場所にあった晒し場が想定されている。骨は、再埋葬にあたって掘りかえしたり移動する時にまじりあったり、紛失したりする。これがごちゃ混ぜ、無秩序になる原因である。石室へのアクセスは前庭部からなされ、すべて納めてしまうと閉塞された。
- (13) ピゴットは、ダニエルが示した骨の不均衡に気づいていたものの、それが何を意味するのかについて、'54年の段階では何も記していない(Piggot1954)。ただ、彼は石室を内部主体にもつ長形墳から大量の不完全な骨が出土する原因を、家族または王家による継続的な埋葬の結果とみていたので、その過程で骨が欠けたり混ざったためにそのような不均衡が生じたものと考えていたことがうかがえる。やがて彼は、'55~'56年におこなったウェスト・ケネット長方形石室墓の調査成果をもとに骨の不均衡の原因を説明した。

ピゴットは、埋葬された人数に対して、長骨、頭骨、下顎骨の数が足りないことを重視した。これはウェスト・ケネット長方形石室墓から出土した人骨を形質学的に調査したウェルズ教授の、頭骨と長骨が重要視されている、という指摘をうけたものである。ピゴットは特定の骨が足りない理由を、何段階にもわたってこれらの骨が抜き取られた結果であるとし、この考えをうまく説明できない納骨堂説をしりぞける。そして継続儀式のために長形墳からもってこられたものではないかというイソベル・スミス博士の教示をとりいれて、頭や大腿骨が農業生産の豊穰を願うための儀式に使われたものと考えたのである。のちにポスト・プロセスの学者達が主張する骨の循環説の発端はここにあるとみてよい。

- (14) この長方形石室には5つの小室があり、それぞれに納められている人骨の形質には以下のような特徴がある(図11)。
- もっとも奥にあって最大の大きさをほこる西石室は、成人男性が優勢の構成である。1つ手前の第一副室(南西石室と北西石室の2つがある)は、成人の男女が優勢である。
- もっとも手前の第二副室のうち、左側の南東石室は、子供と青年が優勢でしかももっとも破片化が激しく、関節がつながった骨がまったくないという唯一の特徴をもつ。

第二副室右側の北東石室は、老人が優勢である。

石室から見つかる動物の骨は、肉がついた状態でここに持ってこられ、饗宴の儀式で用いられたあと、石室内に納められた。第二副室の右側の北東石室では、家畜の牛の骨が卓越する。そしてそのほかの石室では羊と豚の骨が主に置かれる。

1955~1956年の調査で発見された人骨には、医学上問題のある骨が顕著である。しかも致命的な病気が多い。幼児や子供の骨には病気のあとが残りにくいのでわからないが、成人の骨には、脊椎や腰の関節炎が多く認められている。湿気が多く涼やかな気候が原因であるとされている。男は骨折の度合いが高く、日常の仕事や

戦闘の結果とみられている。また脊椎破裂などの遺伝的な病気や先天的な病気が確認されていることは重要で、シングルな家族集団であったことを示す証拠となる。

- (15) チーフダム（首長制）は、当時の人類学のなかではファッションナブルな社会モデルであった。チーフダムは、恒久的な中央機関をもつ再分配の社会で、経済だけでなく社会・政治・宗教的な機能を兼ね備えている。チーフダムの社会は当然、階級社会で、首長によって組織された生産物の再分配を特徴とする。高い人口密度、高い生産性、厳密に設定されたテリトリーをもち、より統合された社会である。
- (16) そのなかにはテリトリーの境界として明確に位置づけられるものが存在すること、経済活動と同様の社会・宗教センターが存在すること、そこでは社会的ニーズに応じ頻繁に儀式がおこなわれていたこと、公共の労働奉仕としての寺や墳丘、ピラミッドなどが造られていること、という項目がある。
- (17) 豊かな狩猟採集民であった地元の中石器時代の人々が農業や家畜の飼養をはじめると、人口は増大し、移住してきた新石器農耕民との間でたちまち土地不足の問題が生じる。そのような状況のなかでは、共同体の結束を高めるために、または自分達のアイデンティティーを確認する意味で、社会・宗教的行事への共同参加が計られる。巨石記念物はそのための象徴として建造されるものである。
- (18) ホッダーはケニアの民族調査をつうじて、乏しい資源をめぐる熾烈な競争がおこなわれている原住民間の境界領域では、必要なものを獲得するための戦略として象徴物が必要になってくるといふ事実や、グループ間に緊張が生じた際、ある特定の人工物にグループ内の共通性や帰属性が高まってくるといふ事実を目をつけた。新石器時代においては、巨大な墳丘と記念物にそのような役割が与えられていたと考えている。
- (19) ブリテンの先史時代を経済と文化的構造からみるという立場を徹底させ、農業の発達にともなう土地獲得競争の激化にともなう矛盾を解決する手段として、長形墳などの巨大なモニュメントが出現するとした。これは、これまでの時代区分がラボック以降の技術様式論にもとづいた大枠のなかでおこなわれていたのに対し、経済・文化構造という属性によって再区分したという点で評価できる。すなわち、ブリテンの先史時代を、前・中期新石器時代、後期新石器・前期青銅器時代、後期青銅器・鉄器時代という3段階にわけ、緊張のない安定したりネージ集団から、土地の権利の維持と象徴化に、競争的な利害関係をもつ地域集団への転換を説いたのである。
- (20) イデオロギーとはなにか。それはある社会において個人と集団との間に生じた矛盾を解消するための装置のようなもので、支配的な集団の権益を正当化するための手段でもあると定義されている。
- (21) コツウォルド・セヴァーン群（Cotswold-Severn Burial）に属する長方形石室を対象にした、石室の平面形態をもとにした分析である〔Thomas1987〕。平面形と集落との距離関係や骨の状態などをもとに分類した3つの石室は、習俗の違いを意味すると考えた。特に石室形態を儀礼習俗の本質と考えている点が興味深い。この墳墓群の石室形態は、新石器時代の前期から後期にかけて大きく変化する。最初は集落から離れたところに築かれ、平面形が単純な石室内に、バラバラになった骨を雑然と置いていたが、後期になると、人口密集地に築かれるようになり、複雑化した平面形の石室内に、完全に復原した骨を1体分納めるようになる。
- 前期の石室が意味する社会は、長方形という単純な石室内にただ雑然とバラバラになった骨を置くことに意味がある。これはバイタリティーと豊かさの象徴である骨が、人と墓の間を移動し、再配置されることを意味する「骨の循環」と、遺体が腐敗し骨化する過程を重視する「変遷」を重要視する社会であったことを意味する。骨の循環は特定の先祖だけに与えられた自然環境を統制する手段と考えられている。
- 後期の石室が意味する社会は、複雑な石室内に、いろんな人間の骨を選りすぐって1体分の完全な骨格を復原したものを置くことに意味がある。年齢、性別の厳格な区分を原理とする社会に変化している。前期から後期にみられる石室構造の変化は、生者と死者の関係が変化し、先祖が現実の社会関係にかかわる必要性が高まった社会の変化を反映したものと考えたのである。
- (22) 多くのイデオロギーによって規制された社会になる。墓は記念碑的性格をもつモニュメントとなり、大石籬やシルベリー丘のように超大形化する。
- (23) バラバラの骨は見られなくなり完全な骨格を有する遺骨に新たな意味が生じる。骨はもはや循環することなく1ヶ所に定着する。石室構造も複雑化する。これらの変化は、名声や財産の相続を重要視する祖先祭祀がはじまったことを意味し、系統性を重視する傾向が強まったことを反映している。すなわち、農業の本格化にともない土地不足が起こり、資源の継承に最大の関心事がうつるといふホッダー以来の説が継承されている。
- (24) '87年に示したようにセヴァーン・コツウォルド群には3つの石室形式がある。単純な長方形石室(図6-2)は、関節の外れた人骨が強調され、等質の様相を示す。側室つき石室は入り口が1つで翼廊をもつ石室だが、

遺体を入り口付近で腐らせ、骨化させたあと、頭骨、下顎、長骨など限られた骨だけを奥の石室に持ち込む。石室内には幾重にも障害が置かれていて、完全な遺体を石室内に持ち込むことはもちろんできないが、頭骨だけはもっとも奥にある壁の窪まったところまで通り抜けられるようになっている。このような障害は単に外部からの侵入者を防ぐだけでなく、概念的に通路を分割することで限定された段階への通過が妨げられていることを象徴していると考えたほうがよい。つまり石室内は祖先骨へ生まれ変わる場所、変態の場所と認識されている空間なのであって、骨は何段階にもわたって取り扱われるのである。それに対して十字形石室は、初葬場からいきなり完全な人骨をもってきて石室内へ入れ、座葬やしゃがんだ姿勢で葬っている。つまり儀式にとっては、すみやかに死体を置き換えることが必要なのである。

- (25) 十字形石室の複雑な構造に表現されている原理で、特に年齢と性別に強い規制が働いている。複雑な儀礼をおこなうのに適した構造になっている。社会的世界のなかにおける境界や区分原理のなかに、墓でおこなわれた儀礼の本質があったことがうかがえる。
- (26) 公と私という2つの空間が分割され、それぞれでおこなわれる行為が重要化したことを意味する。それぞれの行為には調停者が必要である。マウンドが築かれると死者と生者の間には決定的な距離が生じてしまう。閉塞されるからである。そこで過去を風化させることなく、祖先とコミュニケーションをはかる手段として、前庭部で飲食を含む祭儀がおこなわれるようになるのである。
- 民族誌の例は、族外結婚のところでは十字形石室が、族内結婚のところでは単純な長方形石室をとることを示している。
- (27) 林は和島誠一のいう定住の意味を、マルクス＝エンゲルスと同じ「定住生活の形成に伴う土地占有関係の歴史的形態の変化」を説明することにあつたと解釈している。このような視点はレンフリーー以降のブリテン新石器時代研究に共通するもので、土地の継承関係を正当化するための祖先観が取り上げられている。これについては後述する。
- (28) 林が理解するところの水野集落論によれば、「村」はいくつかの家族（小群）のまとまった地域集団であつて、特定の個人が政治的・儀礼的優越を獲得し村を動かしていくと捉え、縄文社会にのちの首長にあたるものがうまれてくる可能性を否定していないという。

Mortuary Practice in Neolithic Britain as seen in the Archaeological View

FUJIO Shin'ichirō

This paper introduces research on mortuary practice in Neolithic Britain. Megaliths have been researched since the start of modern archaeology in Britain. Megaliths are used to provide a chronology for the Neolithic Period, but are especially known for the large number of disarticulated bones found associated with them. These bones have naturally led to the interpretation that megaliths were somehow related to burial, and attention has focused on why the bones are so numerous and why they are discovered in a disarticulated condition.

During the 1950's, research began to ask why large numbers of disarticulated bones were placed in the chambered tomb. During the process archaeology in the 1960's, research stressed that this behavior reflected the social structure and organization, and megaliths were perceived as monuments. A reaction against this school of thought, however, began in the 1980's, and a new approach focused on symbolism expressed by the behaviour itself and the structure of the stone chambered tomb. The current interpretation is that the burial rites transcended economic considerations in the early Neolithic, and that the behavior was a strategies of representation.

Over the past 20 years, interpretation of Jomon Period burial sites in Japan have focused on kinship and social structure, and on the type of religions, burial rites that were conducted at these sites. Future directions should attempt to bridge the gap in our understandings of mass secondary burial such as practiced in the early Neolithic of Britain, and individual primary burials practiced in Jomon period.